もっといい明日が見えてくる——Letters from Gnoble

Gno G-let

グノレット

保存版

vol.11

2013年6月発行

東大合格 特集号

医学部合格者インタビュー併載



グノーブルを活かし、
最大の効果を上げるヒント満載。
7期生合格者インタビュー特集。

Gnoble
大学受験 グノーブル

Gnobleは、私たちの理念をこめた造語です。
Gnoは「知」、bleは「力」をあらわします。
Gnoは、knowを意味するギリシア語、bleは、ableに由来します。
oは「知識のつながり」、「人とのつながり」も意味しています。



7期生　合格者インタビュー

東大文系 P1-13

東大理系 P14-24

医学部 P25-36

2013年東大・国公立慶医合格者インタビューをお届けします。

6回に渡る座談会をかなり詳細に再録しました。膨大な情報量になっていますが、各参加者の発言からは、グノーブルを活かして最大の効果を上げるためのヒントがぎっしり詰まっていると思います。

また、読み進めていただくことで、グノーブルがどんな「文化（カルチャー）」を持っている塾なのかという点もよくご理解いただけるのではないでしょうか。

たとえ隅から隅まで目を通さなくても、マーカー類を片手に参考になる箇所に印をつけながら、次のような目の通し方をしていくのもいいでしょう。

・学校の先輩の発言を拾う
・目指す科類や学部進学者を追う
・（東大や医学部志望でなくても）気になる見出しに目を通すetc.

勉強を進めて行くときに大切なことは、はじめは先輩の体験や先生の助言を参考にして、徐々に自分に合った勉強法を確立していくことです。このグノレットの中に、お手本にできることがあれば、ぜひ、お試しください。

また、勉強に行き詰まったり、気持ちが折れそうになったり、迷いが生じることもあるでしょう。そんなときには、あらためてこのグノレットを開いて先輩たちの声に耳を傾けてみてください。きっと「勇気・元気・やる気」をもらえると思います。

2013年6月　グノレット編集部

7期生 合格者インタビュー

東大文系

[座談会出席者]（50音順、本文中敬称略）

Part 1



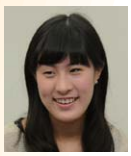
大久保（おおくぼ）　彩（あや） さん
（文Ⅱ・桜蔭出身）



黒澤（くろさわ）　水里（みさと） さん
（文Ⅰ・桜蔭出身）



是永（これなが）　翔太郎（しょうたろう） さん
（文Ⅰ・麻布出身）



竹谷（たけたに）　綾（あや） さん
（文Ⅰ・学芸大附属出身）



長谷川（はせがわ）　哲也（てつや） さん
（文Ⅱ・開成出身）

Part 2



伊藤（いとう）　龍一（りゅういち） さん
（文Ⅰ・駒場東邦出身）



鐘ヶ江（かねがえ）　宏（ひろし） さん
（文Ⅰ・開成出身）



黒木（くろき）　あたる さん
（文Ⅰ・駒場東邦出身）



平山（ひらやま）　博康（ひろやす） さん
（文Ⅱ・開成出身）



森（もり）　紫苑（しおん） さん
（文Ⅰ・学芸大附属出身）



山田（やまだ）　智子（ともこ） さん
（文Ⅰ・桜蔭出身）

7期生 合格者インタビュー 東大文系 Part 1

グノで友だちをつくるのはいいことだと思います。事実ここにいる出席者の人たちは素晴らしい人たちで、そういう人にグノで知り合えたことがとても刺激になりました。

是永（これなが） 翔太郎（しょうたろう） さん（文I・麻布出身）

大久保（おおくぼ） 彩（あや） さん（文II・桜蔭出身）
黒澤（くろさわ） 水里（みさと） さん（文I・桜蔭出身）
是永（これなが） 翔太郎（しょうたろう） さん（文I・麻布出身）
竹谷（たけたに） 綾（あや） さん（文I・学芸大附属出身）
長谷川（はせがわ） 哲也（てつや） さん（文II・開成出身）

《入塾のきっかけ》

長谷川：きっかけは、アメリカのシカゴに５歳から10歳までいたときからの先輩だった*桑原周太郎さん（グノーブル３期生・筑駒→東大法学部）に相談したら、「英語だったらグノがいい」とアドバイスを受けたことです。彼の言うことは間違いないと思ったのでその言葉に従って決めました。

高１のときに英語と数学で入りました。国語は「自分で頑張るぞ」と意地を張っていたんですが、自分の勉強方法に不安を感じ、高２秋からお世話になりました。

*Gno-let Vol.7 座談会にご登場いただきました。

竹谷：私も小４から中１までアメリカに住んでいたので、英語の強い塾を探していたんです。そのときにグノの英語に通っている友だちから勧められました。

数学については、どうしても不安を感じていたので、途中からでも入らせていただき少し早めにスタートしました。

数学が高１の秋、英語は新高２から、古文は高２の春期から１年間お世話になり、高３からは東大国語を受けました。

是永：英語で高１の冬からお世話になりました。高１の全国模試を受けたとき、かなりヤバイ点数で「そろそろ塾に行かなきゃ」と思い、同じ部活の友だちに勧められて冬期講習を受けたら「これだわ！」と思ったんです。

国語も学校でグノの古文が評判になっていたので高２の春からとって、現代文も高２の夏からお世話になり、高３で東大国語をとりました。

数学は以前、別の塾に行ったり、大手の予備校に行ったりしたときに先生との距離感が違うなと感じて、高３からグノに来ました。

大久保：高２のときに、クラスで塾に通っていない人が２、３人ということに気づき、「これはヤバイな」と思ったんです。ひとつ上の兄がグノの英語と数学に通っていて満足している様子だったので、夏から英語で入りました。最初から、直感的に「すごくいい！」と思いました。

２学期からは数学でもお世話になりましたし、国語も高２の１月からの古文基礎講座があって、その後も引き続き東大国語をとりました。



黒澤（くろさわ） 水里（みさと） さん（文Ⅰ・桜蔭出身）

黒澤：学校で「英語はグノがいい」という評判があったので、高１の秋に他塾から移ってきました。前の塾は演習量に不安があったんです。友だちの話を聞くとグノは演習量も多いし、英文の質も高かったし、「やっぱり英語はグノかな」と思いました。

数学はそれまで塾に行っていなかったのですが、新高３が始まるときに「そろそろ本腰を入れてやらなきゃ」と思い、英語で授業の質の高さに手応えを持っていたグノを信じてお世話になることにしました。

《グノーブルの英語》

是永：最初から印象はすごく良くて「この塾は信頼できる」と、グノに対する僕の思いは固まりました。知的好奇心をぐいぐい引き出してくれる授業をしてくださいましたし、それでいて、程よい緊張感もあって、うわさ通りの素晴らしい授業でした。

大久保：本当に楽しくて新鮮でした。印象的だったのは、語源までさかのぼって英単語の説明を受けていると、ばらばらに見えていたものがどんどんつながっていったことです。

解説が深くて、言語としての奥行きみたいなものも初めて実感できる授業でした。あと演習量も多くて、周りのレベルも高かったので、「頑張らなきゃ！」という気持ちになれました。先生が毎週添削してくださるので、「いつも見てもらえている」と思えたことも大きかったです。

黒澤：私は授業のときはいつも一番前に座っていました。先生が熱い授業を展開されて、そのエネルギーを感じることができました。やっぱり、先生の発するパワーは生徒のやる気を刺激しますし、影響力が大きいと思います。

是永：その意味では僕も英語に向かう姿勢が本当に変わりました。こんなに熱心に面白い授業をしてくださるんだから、結果を残したいと思うようになりました。

それまでは英語を受験勉強の一つにしか考えていなかったんです。だから常に受け身でいたんですけど、グノで

授業を受けて、ここでの勉強を続ければ、使える英語が身につくと確信を持てて、自分から積極的に英語に取り組んでいこうと思えるようになりました。

長谷川: さほど受験を意識しない高１、高２からずっとグノで続けられたのは、やはり先生の人柄が素晴らしかったということと、グノの空間がすごく好きだったからです。これは、英語に限らず数学にも国語にもトータルに言えることです。この塾に対する愛着が強まりました。

黒澤： 授業中にモチベーションが上がる瞬間がたくさんあって、それが頑張れる要因だったと思います。受験のテクニックだけを学ぶ暗記型の受験英語は面白いと思いませんが、グノのように英語を言葉として学んでいくと、英文の深みまで知ることができて純粋に「楽しいな」と思うことができましたし、退屈する瞬間は全くありませんでした。



長谷川（はせがわ）　哲也（てつや） さん（文Ⅱ・開成出身）

長谷川： アメリカで英語を身につけていたとき、分からない単語は、その響きを感じて意味を推測していたんです。グノで授業を受けてみて、その推測法と同じことがもっと分かりやすく説明されていると感じました。同じ語根とか、接頭辞や接尾辞には同じ響きがあるわけで、グノの授業はネイティブ感覚を学問的に説明しているということじゃないでしょうか。

それから、文脈を手がかりにして全体の意味を取るのは現地で習慣化していましたが、全体の流れというか文脈を大切にするというのはグノの先生もよく強調することです。僕が感覚でやってきたことをロジックで裏付けてもらえた感じでした。

あと、アメリカでは、作文するときに同じ言葉を使わずにとにかく言い換えなさいと繰り返し先生に言われていたんです。グノでも、「英語では同じ言葉を使わずにどんどん言い換えていくから、それを意識できるようになると英語のセンスが磨かれる」という解説をしょっちゅう聞いていました。日本ではグノの授業以外では聞いたことがありません。

上から目線なんですけど、この塾は本当に英語のことを分かっている人が教えてるなと思ってました（笑）。ただ、偉そうに言っても、しょせん小４レベルの英語力だったわけですから、それを東大受験レベルに上げていただいたのはグノのおかげです。

竹谷： グノで扱う英文の質の高さと量が魅力でした。よく、大学受験の問題や、対策用の問題集には高校生用に書き換えて分かりやすくした英文がありますが、あれが私は嫌いなんです。読んでいても不自然なのが分かるし気持ち悪いし。グノの場合は先生が生きたままの英語を教材にしてくださって、これだけのクォリティのこれだけの量の英文に触れられるのは本当に魅力でした。

それから、私はアメリカで英語を身につけたので文法説明に弱いところがあるんです。高２のころに質問したときのことなんですが、説明に対して私が「はい」と言いながらも納得していない顔をしていたのだと思うんです。そうしたら、しばらくしてから先生が私のいる教室に飛び込んでいらして、「竹谷さん、さっきの質問はこうなんですよ！」とわざわざ該当する例文の載っている辞書のページを見せてくださって、さらに詳しく説明してくださったんです。そこで本当によく理解できたのはもちろんですが、「小さな質問にこんなに真剣に考えてくださるんだ！」と感動したし、私のことをよく見てくださってるんだと思い、「この塾は信頼できる！」と心から思いました。

《グノーブルの数学》

竹谷： 高校１、２年の頃は生活のリズムが完全に部活中心だったので塾に来る時間はいつもヘロヘロで、もし大手塾の遠い黒板を見ていたら絶対に寝ていました（笑）。でもグノでは、先生が一人ずつと会話していく感じで授業が進んだので、疲れていてもやれる、という授業でした。



大久保（おおくぼ）　彩（あや） さん（文Ⅱ・桜蔭出身）

大久保： そうなんです。数学は授業中に問題を解いていると先生が回ってきます。緊張もするのですが、逆にそれが少人数制の良さだと思います。一人ひとりの生徒の分野ごとの得意、不得意をきちんと把握してアドバイスをしてくださったのでとても信頼できました。

黒澤： 高３前期の最初に、思考の一般化っていうのか、「ある問題からある考え方を帰納して、それを演繹して体系立った実力に換えていく」というような話を先生がしてくださいました。１つ１つのことを前期で深く理解していけば、後期の演習で経験を積むことで得点力がぐんぐん上がると言われ、数学が苦手だった私には希望が大いに

持てて、やる気がわきました。

大久保：そうなんです。「１つ１つの問題から一般性を引き出して指導するから、それを身につければ夏以降の演習でどんどん力がつく」と先生がきっぱりおっしゃってくれて、その言葉を信じて続けていたら、実際に夏から飛躍的に力が上がりました。

長谷川：ズラリと並んだ数式の連続を、先生が明快な言葉で解説してくださいました。論理の流れを言葉に圧縮して理解していくというやり方は、僕にはとても合っていました。

竹谷：高３になったときから担当してくださったその先生は、最初はすごく怖いイメージでした。「本当にこの先生でやっていけるんだろうか？」と不安に思ったこともありました。でも、夏頃からどんどん先生との距離が近くなって、それは自分の力が伸びている証拠だなと思えました。



これなが　しょうたろう
是永　翔太郎 さん（文Ⅰ・麻布出身）

是永：よく先生が、「お客さんになるな」とおっしゃってたよね（笑）。

竹谷：そうそう！私も最初は、まさにお客さんのような気分で、教室でも後ろの方に座っていたんです。夏頃からはだんだん前の方で授業を受けるようになっていったんです。

振り返ってみると、演習の量も充実していてとても良かったです。それから、予習チェックを先生が毎回してくださって、自分では「できている」と確信しているところでも、先生の指摘を受けてハッとさせられることがよくありました。一人ひとり見てもらえて本当に感謝しています。

是永：他塾だと予習をしていって解説を聞いてというスタイルです。質問もしにくくて。そこがグノは全然違ったし、この先生についていけば「できるようになる」と信じられました。

長谷川：うちの学校は運動会が盛んだし、数学にはちょっと自信も持っていたので、数学を本格的に始めたのが高３の８月くらいだったんです。そのころは数時間にも及ぶ質問もしましたけれど、こちらが理解できるまで根気強く説明してくださいました。分からない問題を持っていっても、解答のプロセスを教えてくださるだけじゃないんです。なんでこうなるのかという背景まで教えてくださったり、応用の仕方を教えてくださったり、その問題が数学の世界の中でどのように位置づけられているかまで教えてくださいました。おかげで、秋頃までにはかなりの力をつけることができました。こちらがやる気を示せばとことん親身になって対応してくださるのがグノの先生です。

黒澤：私の場合、高３後期で担当していただいた先生の、細かな計算まで詳細に書かれたプリントがすごく助かりました。私、結構計算でつまずいて解けないこともあったので。先生が生徒思いでなければあそこまでの手書きのプリントを作るのは面倒でとてもできないと思います。

《グノーブルの国語》

竹谷：先生が古文単語のイメージをつけていくやり方が抜群に面白かったんです。古文単語に関しては、授業の解説と、授業中に配られた薄い２冊だけで大丈夫でした。

今振り返ってみると、高２のときの１年間で、古文に関しては本当に成長できたと思えます。高３でとった東大国語では、本当に得点力を伸ばせたと思います。先生には心から感謝しています。

是永：国語の先生には、教室を劇場のような雰囲気に変えてしまう面白さがありました。でも面白いだけじゃなく、文章の書き方をしっかり指導をしてくださったことと、古文は１年間だけやれば「確実に力をつけられる」と確約してくださったことが大きかったです。

大久保：グノの授業はどの教科の先生の授業も面白いんですが、国語の場合は interesting＋funny みたいな（笑）。両方の意味で面白くて、毎週授業を受けるのが楽しみでした。

でも、ただ面白いだけじゃなく、東大の問題について深く研究されていて、「東大が求めているのはこれだから、こういう力をつければいい」というのが明快な授業でした。

国語の場合、記述の自由度が高くて何が正解か分かりにくいことがあります。でも、美しい答案でなくてもこのラインまで至った書き方をすればいいという指示をいつもはっきりしていただけたので、自分の中にも基準をしっかり備えることができました。模試でも、本番でも、その基準に従って答案が書けたので、自信が持てるようになりました。



たけたに　あや
竹谷　綾 さん（文Ⅰ・学芸大附属出身）

長谷川：国語はもともと苦手科目で、以前は、記述の答案も感想文のようなものしか書けませんでした。受験界で有名な先生の参考書を読んだことがあ

りますが、解答例を読んでも、「あ～あ、こんなの書けるわけない」と思ってました。

でも、グノでは、模範解答の書き方じゃなくて、最低水準のレベルでも確実に点がとれる記述の仕方を指導してもらえました。東大本番のような緊張状態の中で苦手科目に臨む上ではとても大切なスキルを教えてもらえました。

大久保：先生がよく、「作題者の意図」と「採点者の想定」とおっしゃっていて、解答のポイントを意識して解答を書くことを徹底的に指導してくださったので、緊張状態の中でも何を考えればいいかが分かっていたので、本当に助かりました。

是永：それは他の科目でも役立って、たとえば世界史でも、どこが採点されるポイントなのかを常に考えるようになりましたし、答案の構成を整えるという姿勢もグノの国語で身につきました。

《英語力がついたと感じ始めた時期》

大久保：はっきり自覚していたわけではありませんが、入って半年くらいの頃でしょうか。高３の夏期講習のときに結構難しい要約問題で満点をいただいたことがあったんです。「あ、力がついたんだな」と思いました。英文全体を捉えられるようになったということだと思います。

そこからはさらに、何度か段階的に力がついていることを実感したことがあります。やはりきちんと復習と音読をしていたことが力になったと思います。

黒澤：新高３のクラス分けテストで、激しく２つクラスが落ちたことがあったんです。実はそれまで、復習や音読を真面目にやっていなかったんです。そこでようやく目が覚めて、初めて先生に相談にいったところ「音読と精読だよ」とアドバイスをいただき、そこから音読と読み込みを徹底的にやりました。

春休みのクラス分けテストで、また元のクラスに戻れたのですが、そのときにはすごく伸びていたと思います。私の場合は黙読だと英文を読み飛ばしてしまいますが、音読すると英文を丁寧に読むことができるんです。音読の効果は大きいと思います。

長谷川：僕の場合もともとコツコツやるのは苦手なので、模試の前に一気に勘を取り戻したりと、ある期間に集中的に読み込みをしていました。

でも、特に伸びたなと思ったのは、秋に病気をして２週間ほど家で休んでいなければならなかったときです。それを自分では「英語の集中合宿」と捉えて、今までやったグノのプリントを全部読み返しましたが、その直後にかなり伸びました。

結局のところ、どれだけ英文の量を読み込むかに尽きると思いますが、量をこなすためには質が大切です。内容が面白くないとやってられませんよね。その意味ではグノの教材は、精選された内容ばかりで、一日中読んでいても飽きませんでした。



大久保（おおくぼ）　彩（あや）さん（文Ⅱ・桜蔭出身）

大久保：グノのプリントは本当に読んでいて楽しいんです。勉強に飽きたら「音読しよう」という感じで、私の場合、音読自体はもう勉強という感じではありませんでした。「あ、これ好きな内容だ」と思えるプリントがたくさんあって、読んでいるときはノリノリなんです。

竹谷：入った当初は理系の英文が出てくるとなかなか理解できませんでした。でも、たくさんの英文を読んでいくうちに、頭にスラスラ入るようになるのを１年くらいで実感しました。これは英語力が向上してきたというのもあると思いますが、それと共に知識の幅が広がっていったということがあると思います。

最初の頃は、科学や医学分野に興味がなかったので知識も不足していました。ところが授業では、そうしたジャンルの英文も数多く扱い、それを先生が面白く解説してくださったことで知識の幅も広がりました。背景知識が広がったのは英文を理解する上では大きな力になりました。

是永：何度か段階的に伸びを実感したことがあります。僕の場合クラスの上下が激しく、一番基礎のレベルも経験したので、そういうときには頑張って力を伸ばしていくという感じでした。

でも、英語力そのものが伸びてきたなと思ったのは上位のクラスに上がってからです。そのクラスで受け続けたくて、それまではいい加減にしていた音読に真剣に取り組み始めたからです。それから、本当の英語力がぐいぐい伸びていったと思います。

授業で扱う英文の中には、ｉＰＳ細胞とかヒッグス粒子とか最新の情報を扱っているものも結構あって、後でニュースを見て、「お、これ、グノでやった」と思えたり、授業で理解が深まっているのでいつも以上に関心が湧いたりすることもありました。とにかく英文の内容が面白いのでグノのプリントの音読は飽きることなくやれました。

長谷川：病気のときには高熱が出ていて、秋なのでそれなりに焦りもあったので枕元には他に世界史とか日本史とかも置いてあったんですが、唯一やる気が出たのがグノのプリントの復習でした。それは圧倒的に楽しかったからなんです。今まで自分が知らなかった分野のことや、専門性の高い内容だとか、グノのプリントには興味を惹きつけてくれるものがいっぱいあったんです。

竹谷：面白いというのもあるんですが、「これは将来きっと使える知識になる」という感じもしましたね。受験勉強って、自分の将来の役には立ちそうもないけれどやらざるをえない、というものもあるじゃないですか。グノの英文はそういうものじゃないんです。



竹谷（たけたに）　綾（あや）さん（文Ⅰ・学芸大附属出身）

大久保：授業の中で、先生が深く分かりやすく解説をしてくださるから、その知識が単に知っているレベルじゃなくて、人に話せるレベルにまでなっていました。

一度、小論文の講座を受けたことがあって、そのときには、「グノの英文で知った内容は小論の題材としてものすごく使える！」と気づいてとても嬉しかったことがあります。

グノの英語でいろんな分野の英文を興味深く読んでいて、それが頭の中にインプットされていたので題材に不自由することがありませでした。

長谷川：英作文についても言っておきたいんですが、たくさん英文を読んだ経験が英作文にも大いに役立ちました。自分の中にいろんな言葉や表現の蓄積ができたのです。英作文を実際に書く練習もグノでたくさん経験できたので、直前期には、自分の表現したいことで英語にならないものはほぼなくなっていました。スラスラとノンストップで書く力も身につきましたから、東大タイプの英作文なら５分ぐらいで書けて、時間短縮という意味でもすごく助かりました。文法ミスなども、先生が添削を通して毎回細かく指摘してくださったので、その蓄積で正確さも増しました。

《グノーブルの英語はなぜ東大に強いか》

竹谷：東大受験を意識し過ぎていないからだと思います。

東大に特化し過ぎると、そこからちょっとでも外れた問題が出たときに対応できません。過去問重視の塾もありますが、東大の場合、毎年少しずつ違う問題が出るわけですから、東大英語に偏った勉強をしていても応用がきかないと思います。

それに対してグノでは、いろんな問題形式の、いろんな分野の英文を解いているので応用が利きます。英作文でもいろんな題材の文章を書いてきたので、今年のように英作文が２つ出ても焦ることもありませんでした。

是永：要約がいい例ですが、「毎週あれだけの量の要約をやってきたんだから」という、やってきた量に対する自信がありました。そうした自信が力になるのではないでしょうか。

大久保：東大の過去問をやってみても、グノより難しい問題はありません。東大英語は時間が足りなくなるって聞きますが、私は全部終わって、ちょっと時間が余るくらいの余裕がありました。あと、英作文も、英文の型をしっかり教えていただいた上で、毎週結構な量を書いてきていたので自信がありました。自由英作文も１００ワードを越えるものもよく書いていたので、本番で英作文が２つ出ても「たいしたことないな」と思いました。

黒澤：私も量と質がありがたかったなと思います。あと、根本的に英語は英語なので、特別東大に偏った勉強をしなくても、英語の土台さえしっかりできていれば対応できると思います。ただ要約などは数をこなすことで自信がつくので、その点についてもグノでやってきたことは間違いなかったと思います。

長谷川：たぶん東大の求める英語の理念と、グノの英語の理念が一致しているからだと思います。つまり、使える英語です。大人が日常的に知的に少し高いレベルの会話をするときだって、のんびり考えていたら会話が成立しないわけで、言葉を自在に使いこなすには、ある程度のレベルのものを限られた時間で大量に触れていないといけないわけです。単に「東大英語」という看板を出して形だけを真似るのではなく、その形が生まれた理念が一致しているからグノの英語は東大にも強いんだと思います。

《学校でのグノーブルの評判》

長谷川：開成では、グノの先生が授業中に話されたことが学校で会話のネタになるくらい、英語に関しては浸透しています。数学と国語の知名度はまだまだですが、授業を受けている人はいいと言っていますし、これから先は開成の中でもどんどん拡大していくと思います。

竹谷：学芸でもグノの英語は有名でしたが、だんだん国語の受講生も増えてきて、高３の頃になると国語も密かなブームになっていました。私の学年は優秀な人が入っていたので、高２、高３くらいからどんどん増えていったという感じでした。



長谷川（はせがわ）　哲也（てつや）さん（文Ⅱ・開成出身）

長谷川：そういう流れはあります。開成でも、僕が理Ⅲに合格した＊芋川くんをグノに誘い込んだときから一気にグノに入る人が増えたというのがありましたから。優秀な人が入ると宣伝効果は高いと思います（笑）。

＊26ページから始まるインタビューにご参加いただきました。

是永：麻布でも、英語といえばグノだよね、というのがあって、学校でグノの数学の宿題をやっていたら、友だちに「グノって数学あるんだ！」と驚かれたことがあります。「スゲーいいよ！」って宣伝しておきました（笑）。



これなが　しょうたろう
是永　翔太郎 さん（文Ⅰ・麻布出身）

大久保：桜蔭では、高３になったころから英語で入る人が急増しました。
黒澤：急増したよね。
大久保：数学や国語を受講している後輩をグノで見かけることは結構あったので、桜蔭生もグノで英数国をとる人がこれから増えていくんじゃないかと思います。

《後輩たちへのアドバイス》

長谷川：ある意味悩んでというか、ちゃんと考えるのがいいと思います。そうして初めて自分の実力を伸ばす勉強法に出会える気がします。僕の場合も、それなりにいろんなことを考えていました。

最初、僕は受験の競争を１番を取りに行くものだと誤解していました。１番を目指すとなると独自性が必要です。でも、よく考えたら東大受験は３分の１が受かる競争です。むしろ、皆と同じことを他の人よりしっかりやるのが正しいという見方に変わりました。

とは言え、人はそれぞれ別々ですから、自分を知って、自分に合った勉強の仕方も見つけなくてはなりません。

僕の場合、英語と数学に関しては自分なりに持っていた考えとグノの方針は一致すると思えましたが、苦手だった国語に関しては、グノの先生の話を聞いて自分のそれまでの考え方とはかなり違うと気づきました。そのときじっくり考えた上で、グノのやり方が正しいと思えたので、パラダイム転換を受け容れることにしました。

方向性が定まれば、それに従って邁進できるし成績も伸ばせると思います。
竹谷：グノに通っている限りはお客さんにならないことが大事だと思います。出されるプリントは一流でも、１度やっただけでは自分のものにはならないと思います。自分から積極的に自分のものにするために頭も手も動かさないと力はつかないと思います。もらった教材を自分でファイルして整理していくところから始めて、グノを１００％活用していく姿勢が大切だと思います。

私の場合、英語も数学も国語も、問題集とか単語帳とか何も買ってなくて、自分で買ったものは過去問だけです。それぐらいグノには力をつけるための道具が全部用意されているので、あとはそれを活かしていけば大丈夫です。
是永：高３になってから、やっぱり自分もどういう勉強法が自分に合っているのか模索し始めました。自分の考えに先生に言われたことを取り入れて、それでだんだんと自分の勉強法を確立していくのが受験勉強じゃないかなって思っていました。

でも、グノで取っていた科目について言うと、先生の言葉を信じ切って勉強に向き合うことが早道だと思います。最初は、音読しろとか、単語帳はやならなくていいよと言われても不安だと思うんですけど、結果はしっかり出るんで信じてやってみることです。

それから、グノで友だちをつくるのはいいことだと思います。事実ここにいる出席者の人たちは素晴らしい人たちで、そういう人にグノで知り合えたことがとても刺激になりました。英数国、どの授業のときも、自習室でも、いっしょにいると気合いが入りました。
黒澤：やっぱり私もそういう刺激を自分の向上心につなげることが大切だと思います。いい先生が揃っていて、いい友だちもできると思うので、それを自分の原動力にして、グノを最大限に活用して頑張って欲しいと思います。



くろさわ　みさと
黒澤　水里 さん（文Ⅰ・桜蔭出身）

大久保：受験を楽しんでもらいたいと思います。そのためには寄り道を怖がらないことが大事です。私は何か気になることがあって、気づいたら地理を４時間やってたとか、数学に集中して８時間やってたということもありました。

時間がないと思い込んで効率的な勉強をしようと考えてしまうことがあると思いますが、一つのことをとことん掘り下げるような勉強も、夏くらいまではやった方がいいと思います。その方が面白いし、その面白さこそが、１年間という長いスパンを頑張り切る原動力になります。

それから、東大を受験する場合、英数国社のうち３つには、ある程度の自信を持てるようなプランで準備をするといいと思います。「３つのうち本番で１つ失敗したけど２つはうまくいった」ぐらいで十分合格できるはずです。英語は一番安定しやすい科目だと思うので、グノ生は英語をまず固めて、あとはグノで数国を受講して自信の持てる科目にすればいけると思います。

7期生 合格者インタビュー 東大文系 Part2

説明会に参加したときに、英単語を語源から説明してくれたんです。グノでは語源から説明してくれるとは聞いていたのですが、実際に目にしてみたら予想以上に面白くて、グノに入れば毎週この授業が受けられるんだとワクワクしました。

山田（やまだ）　智子（ともこ） さん（文I·桜蔭出身）

伊藤（いとう）　龍一（りゅういち） さん（文I·駒場東邦出身）

鐘ヶ江（かねがえ）　宏（ひろし） さん（文I·開成出身）

黒木（くろき）　あたる さん（文I·駒場東邦出身）

平山（ひらやま）　博康（ひろやす） さん（文II·開成出身）

森（もり）　紫苑（しおん） さん（文I·学芸大附属出身）

山田（やまだ）　智子（ともこ） さん（文I·桜蔭出身）

《入塾のきっかけ》

伊藤龍：もともとは大手の予備校に通っていましたが、英語の成績があまり伸びていませんでした。それで、高２のときに学校で評判が良かったグノの冬期講習を受けてみました。授業が素晴らしくて、「これだけ演習をやって充実した解説を受けられる塾は他にはない！」と思いました。これについていけたら必ず伸びると確信めいたものを感じました。



黒木（くろき）　あたる さん（文Ⅰ·駒場東邦出身）

黒木：僕がグノに来たのは、伊藤くんが先にグノに入っていて、「この塾の英語すごい！」と絶賛していたのを聞いて心が動きました。駒東には「グノ勢」と呼ばれる英語成績優秀者が多くいて、それまでもグノの評判は聞いていたんですが、決定的だったのは伊藤くんのプッシュでした（笑）。

鐘ヶ江：僕は高１での入塾でしたが、それまではどこの塾にも行っていなくて、最初は母親に勧められるままに入りました。

平山：僕の場合は兄です。中２のときに学校で英語しか話せない合宿があったんです。それを引率してくれたのが日系の人で、英語も日本語もぺらぺらで、それに憧れて英語をちゃんと勉強したいと思ったんです。そんな話を兄にしたら、そのときグノに通っていた兄が「だったらグノだ」と勧めてくれました。

森：高校に入る直前のフレッシャーズ講座を受けて、そのときから英国数ともグノでお世話になりました。

学芸はグノに通っている人が多いらしいと母に言われたり、中学時代の友だちのお兄さんやお姉さんがグノに通っていたりと、割とグノの評判は聞いていたのですが、グノに入塾した直接的な理由は、自分で授業を受けてみて、「あ、ここだ！」と手応えを持ったことです。授業が活き活きしていたし、名前をすぐに覚えてもらえたのも嬉しかったです。

山田：高１の冬から英語は通って、高２から数学もお世話になりました。母が大学時代の友人からグノの評判を聞いてきたんです。ホームページを見てみたら、その年に文Ⅰに合格された部活の先輩がグノだったと知って、その先輩のことが好きだったので私もグノに入りたいなと思いました。



森（もり）　紫苑（しおん） さん（文Ⅰ·学芸大附属出身）

《グノーブルで受けた衝撃》

山田：説明会に参加したときに、英単語を語源から説明してくれたんです。帰り道でもその説明がしっかり印象に残っていて、これなら忘れないと思い

ました。グノでは語源から説明してくれるとは聞いていたのですが、実際に目にしてみたら予想以上に面白くて、グノに入れば毎週この授業が受けられるんだとワクワクしました。

森：私は、英文を返り読みせず、語順のままに意味をとっていくというやり方に衝撃を受けました。「それが自然な読み方なんです」と先生がおっしゃられて、私の中にストンと落ちるものがありました。

あと古文単語も、イメージをつけながら説明してくださる先生の解説が自分の中に強烈に残るところがありました。古文単語でも英単語でも、単語集を見て丸暗記するのが普通だと思いますが、そうではない覚え方が衝撃的で、私にはグノのやり方があっているなと思いました。

平山：中学からグノなので、英単語の覚え方にしても、英文の読み方にしても、僕の中ではそれが当たり前で、それに驚きは感じませんでしたが、学校で他の予備校に行っている人が、指定の単語帳や熟語帳を買って、それを暗記していると聞いて、そのことに逆に驚いたことがあります。



鐘ヶ江（かねがえ）　宏（ひろし）さん（文Ⅰ・開成出身）

鐘ヶ江：最初は１回の授業で扱う英文の量にびっくりしました。この密度でずっとやっていけば確実に力は伸びるだろうと思いましたし、今振り返っても、これだけ英語に触れてきたからスラスラ読めるようになったんだと思います。

伊藤龍：僕も量には驚きました。初めて授業を受けたとき、配られた演習プリントが全然終わっていないのに解説が始まったんです。ところが、周りの人は先生に当てられると答えていくんです。「すごいなぁ」としみじみ思いました。でも「これが解けるようになったら力がついている証拠なんだ」とちょっと心に火がついた感じでした。

黒木：入る前のグノのイメージは、「予備校を少人数にしてちょっと厳しくした感じだろう」というものでした。実際に来てみたら、グノは予備校とはまるで違いました。授業の形式も先生との距離感みたいなものも。

あと、英語は僕の一番の得意科目で自信もあったので、入塾するときには「ちょっと、グノを見てやるぜ」くらいの気持ちでいましたした（笑）。自分よりもできる人がたくさんいるのには驚きましたし、いい刺激になりました。

《授業の素晴らしさ》

伊藤龍：まず、授業の形式そのものが僕たちの集中力を切らさないようになっています。他の予備校や塾だと、家で予習をしていって解説を聞くために塾に行きます。グノの場合はその場で演習してすぐにその場で解説が聞けます。添削もその場でやっていただけますし。グノのやり方の方が圧倒的に集中できます。

それに、先生が用意してくださる英文は、さまざまな分野に渡っていて、入試では扱われないような時事的なものも持ってきてくれるので、「へぇ、こういうニュースがあったんだ」と授業に来て知ることもありました。

鐘ヶ江：先生の解説が、単に和訳していくといった表面的なものじゃないんです。自分では気づけない言葉の使い方の深い指摘がありました。文法の解説も、必ず前から解釈する、ネイティブの視点に立ったものだったので、聞いていてためになることがいっぱいありました。英文全体の主旨がよく分かるように背景的なことも話してくださいましたが、その話が、深くて、幅広くて、何より楽しくて、いつも興味を持って聞いていました。



伊藤（いとう）　龍一（りゅういち）さん（文Ⅰ・駒場東邦出身）

黒木：僕の場合、グノの授業中に頭を使う感じが好きでした。もともと英語は得意だったんですが、グノに来ると難度の高い英文が用意されていて、それを制限時間内に、理解して設問に答えていくというのが、僕のチャレンジ精神を刺激してくれました。グノで出会う英文は内容も面白いのですが、やりがいのあるレベルという点でも精選されていたので、ちょっとゲーム感覚で楽しめました。

平山：先生方が情熱的だったところです。グノに入る前からうわさは聞いていたんですけど、予想を上回る熱のある授業で、先生の熱意に絶対応えたいと思って、こっちも一生懸命になれました。

森：グノの先生方に会うのは一週おきなのですが、でも、どの先生も前の週の私たちのことをよく覚えてくださっていて、「こういう塾はグノだけだな」と思っていました。先生にいつも見てもらえているというのが、私は本当に嬉しかったし、個人的な相談にもすご

く丁寧に耳を傾けてくださったし、この塾には安心感がありました。



山田（やまだ）　智子（ともこ）さん（文Ⅰ・桜蔭出身）

山田：以前の私は数学が大嫌いで、科目として面白いなんて思ったことは一度もありませんでした。グノの数学の授業は、そんな私に数学って面白いと分からせてくれました。

以前は、数学が解けなくて、「結局、量をこなさないとだめなのかな。でも、面白くない科目はやる気が起きないし…」と、いつも悩んでいたんです。

グノに移って違ったのは、先生が一人ひとりをよく見てくれるという点でした。私の苦手なところも、得意な部分も把握してくださっていて、いつも的確なコメントをくださったので、それに応えようと、最初の頃はただ懸命に授業についていきました。

それが高３後半になって、演習中心の授業になったら、「あ、できる！」と実感したんです。前期にやったことを基礎として応用していけば、一見すごく難しそうな問題でも「絶対にできる！」と思えるようになったんです。

１年で数学に対する見方がこんなに変わるとは思ってもみませんでした。数学はセンスやひらめきではないことを実感できました。自信がついてくると、どんどん難しい問題にチャレンジしたくなるという好循環が生まれ、最後には数学が得点源になりました。

《グノーブルの先生》

伊藤龍：駒東では英語だけでなく国語を受けている人も結構いて、「国語もいいよ」と聞いていました。僕は少し国語にも不安を抱えていたので、講習だけでしたが、国語を受講してみたんです。

強烈なインパクトがある個性的な先生で、古文単語のイメージを先生の体全体で説明してくださいました。本当に印象深く、今でも全部鮮明に覚えています。現代文については解答の型を意識して書く指導を受けられて、それは本番でもとても役立ちました。

鐘ヶ江：高１の冬にグノに入って、もともと英語は好きな方でしたが、それが得意科目になったのは、単に授業が分かりやすかったのが理由ではないと思います。高１の頃に担当していただいた先生がとても優しくて、一人ひとりに気を配っていただける素晴らしい先生で、その頃はいい先生にあたって良かったと思っていました。ところが、学年が上がって別の先生の担当になっても、グノの先生はどの先生も人間的に素晴らしい先生ばかりだったんです。先生方の人柄の良さがグノの環境の良さの土台だと思います。

平山：僕は中学の頃からずっとグノに通っているので、いろんな先生に英語を教わりました。今振り返ってみると、グノでは一人の先生だけが素晴らしいんじゃなくて、どの先生も、高いレベルの授業を同じ方向性で実現しているということに驚きを感じます。学校でも、他科目だと「○○塾のなんとか先生がいい」という言い方になりますけど、グノに関しては、「グノの英語はいい」という言い方で話題になっていました。

黒木：グノの先生は他の塾の先生とまるで違いました。ものすごく頭の回転が早いし、ものすごく早口だし、「なんだこの先生は」と思って、一挙にその先生自身に興味が湧いて、集中して授業を聞けました。

以前通っていた予備校だと、先生が来て、テキストを開いて、ぼそぼそ解説をして、時間がきたら帰っていくという感じで、ロボットでもできそうだと思っていました。

ところがグノの先生の場合、予測不能というか、よく知っているなんでもない単語の解説でも、それが意外な方向に展開したり、その奥が見えてきたりして、「オー」と思えることがよくありました。



平山（ひらやま）　博康（ひろやす）さん（文Ⅱ・開成出身）

森：グノの先生は時間外でも本当に親身になって対応していただけるんです。具体的な例は一つや二つじゃありません。

たとえば、夏期と冬期にセンターの発音講座があり、どうしてもその講座を受けたかったのに、夏も冬も都合が合わなかったのです。そのことで先生に相談をしたら、先生が、わざわざ授業前の時間を割いて、マンツーマンで授業をしてくださいました。

直前期には、私も周りの友だちもいっぱい過去問の添削をしてもらっていましたけど、時間外でここまで対応してくれることは、普通ではあり得ないと思います。

山田：私の経験を話しますと、高３のときに授業後に質問をしに行って、先生が珍しくちょっと分からないという

顔をされて「来週説明します」とおっしゃったことがありました。それで、私も友だちと一緒にグノを出たんです。しばらく歩いていたら、後ろから先生が走って来られて、ハァハァ息を弾ませながら、新宿の夜道で解説をしてくださったんです（笑）。ちょっと感動しました。

《英語のままで解釈するということ》

伊藤龍：もともと英語は苦手だったのですが、高２の冬にグノに入って、音読を中心に復習をしているうちに、高３の春には、英語のまま解釈する力がついてきているという実感がありました。

言葉って、聞いたり喋ったりすることで身につくものだと思ったので、僕の場合、要約プリントは５０回を目標に音読して、その他の英文は黙読で復習していました。

自分の実力がついてきているかどうかは、授業中の演習で測っていました。どれくらいスラスラ読んだり書けたりするかとか、配られたプリントのうちどれくらい解けるかとか、あと、添削の点数や先生からの直しやコメントです。



伊藤（いとう）　龍一（りゅういち）さん（文Ⅰ・駒場東邦出身）

鐘ヶ江：高１の冬に入って、高２の夏くらいには、英文を前から読む感覚が自分の中に定着してきていると感じていました。以前は、１回読んでも意味が分からず、日本語に置き換えたり、また読み返したりという読み方をしていましたが、だんだん１回で意味が取れるようになってきて、「英語のまま読めているかもしれない」という感触に気づいて、そのうちに「間違いなく英語のまま読めている」と思えたのが高２の夏頃でした。

ただ、高３の運動会時期の３月から５月半ばまではほとんど英語をやれなくて、その時期にはまたその感覚をなくしてしまいました。やっぱり英語から離れてしまうと力は維持できないので、音読だけは続けているべきだったなと実感しました。

それ以降は、普段からできるだけ多く英語に触れるようにしていました。電車に乗っているときはGSL、勉強で疲れたときはベッドに寝転がってプリントの音読と、なるべく多く英語に触れるよう心がけていました。

黒木：高３の夏休みに、自宅で徹底的に*シャドーイングと音読をやりました。同じプリントを反復することの大切さは日頃から先生に言われていましたから、使ったのはグノの要約のプリントだけです。実際に、目に見えてというか、自分でスピードメーターが上がっていくのが分かるくらい、読む速度が上がりました。９月以降の通常授業では、演習スピードがぐんと上がっているのが実感できました。やっぱり音読を真面目にやると伸びます。

グノの良さって、音読教材の整備にもあるんじゃないでしょうか。グノに入る前から音読が大事なことは知っていたので、自分なりに教材を探してみたりもしましたが、１つの文章が長過ぎたり、難易度が適切じゃなかったり、内容がつまらなかったり、スピードが遅すぎたり、音声がついていなかったりと、実は適切な教材がありません。他の予備校や塾でも、市販されているものでも、どこにもないんです。ところが、グノの要約＋GSLは、まさしく僕が求めていた要素を全てクリアしたパーフェクトなものでした。

*グノーブルお奨めの英語習得法のひとつ、音声教材GSLを聞きながら、影法師を追いかけるように発声していきます。



黒木（くろき）　あたる さん（文Ⅰ・駒場東邦出身）

平山：中３でグノに入って少ししたときには、学校の定期テストならほとんど勉強しなくてもいい点数がとれるようになっていました。「ああ、これがグノ効果だな」と思った記憶があります。

でも、本当の意味で伸びたのは高校に入ってからです。いつ頃なのかははっきり覚えていませんが、英文を読みながら頭の中に日本語が全く浮かばずに、意味がすっと取れるようになりました。高２の頃には、英文を一通り読めば、内容がまるごと頭に入るようになりました。問題文を読み返さなくても、少し確認するだけで設問に答えられるようになって、英語の成績も急激に伸びました。

僕が重視していた勉強法もやはり音読です。まず、授業でやった新しい単語は、覚えようとしながらノートに書き写して、その後はひたすら音読です。１回もつかえないで読めるまで何度も繰り返していました。途中でつかえたら、また最初に戻って読み直し、通しでスムーズに読めたらその英文に関し

ては復習終わりです。初めは大変でしたが、自分で決めたルールだったので頑張れました。でも、だんだん上手になるにつれ復習にかかる時間もどんどん少なくなりました。



森（もり）　紫苑（しおん）さん（文Ⅰ・学芸大附属出身）

森：私の場合、直前までなかなか伸びませんでした。たまに授業の演習中に、「今日は結構読めてるかも！」と感じることもありました。でも、翌週には解説を聞いてから初めて内容が分かるという状態に戻っていました。

ところが、直前になってやっと一段上に上がれました。センターが終わってから、それまでのプリントを全部引っ張り出し、昔のものからどんどん読み直しをしていくうちに、「ああ、本当の力がついてきた」と自分で意識できました。東大受験の10日ほど前でした。

山田:私もいっしょです。私もセンターが終わってから今までのプリントをどんどん読み返していくうちに、突然、私の中で何かが変わったんです。直前講習のときには、日本語が頭の中に出てくることなく意味が分かるし、知らない単語があってもつかえずに読める、という体験をして、「ああ、これが皆が言う“英語ができる”ってことなんだ」と実感しました。

それまでは、高1でグノに入ってから、成績もそれなりに上がってはいましたが、本当の英語力という意味では停滞していて、焦りを感じたこともありました。ただ、先生も音読を奨めてくださったし、合格体験記を読んでも音読がいいと書いてあったので、それを信じて音読はずっと続けていました。その積み重ねがやっと直前になって力になったのだと思います。

あとは、グノでやった和訳問題の解き直しもよかった気がします。和訳の答案を作ろうとすると、実はちゃんと理解できていない部分に気づく、ということがよくありました。

《学校でのグノーブルの評判》

鐘ヶ江：僕が高1の時点では、開成生はあまりいないのかと思っていたんですが、高3になると気づいたらすごくたくさんいました。学校内でも英語の評判は抜群に良かったし、数学でグノに通っている人も増えていたと思います。

平山：確かに高3から一気に増えたイメージがありました。もっとさかのぼると中学の頃はグノに通っている人はほとんど見ませんでした。ここ3～4年くらいで、開成の中での塾の勢力図が変わってきたかもしれません（笑）。

山田：桜蔭も同じで、高2の頃もそれなりにはいましたが、高3に上がるときに目に見えて通い始める人が増えました。

伊藤龍：駒東では、英語ができる人はグノ生が相当多かったです。グノに通っている人数も多かったですし、当然評判も良かったです。

黒木:「グノ勢」という言葉がある通り、駒東でグノは有名でした。「お前、グノ勢なんだ。そりゃ、英語できるわ」とか言われることもありました。でも、「お前、グノ勢なのにできないの？」みたいに言われることもあって（笑）、若干プレッシャーでした。

森：学芸もグノに通っている人が多くて、国語の授業で、うちの学校の生徒が固まって座っていると「圧力団体」なんて言われたくらいです（笑）。仲のいい友だちも多かったですし、グノに通っていることを知らなかった人に「ごめん、今英語のテキスト持ってる？宿題やってないから貸してくれない」などと言われることもあって、気づいたら増えていたという感じでしたね。

《東大受験で役立ったこと》

山田：英語の解答用紙が配られたときに、去年までと違っているのがすぐに分かって一瞬ビビッたんです。でも、英作文が増えたのだと分かって「これなら大丈夫」と思えました。英作文はグノでたくさん書いてきたので自信もあったからです。



山田（やまだ）　智子（ともこ）さん（文Ⅰ・桜蔭出身）

黒木：僕も、「よし！」と思いました（笑）。英作文が増えると、それだけ解答作成に時間がかかるわけですが、自分はグノで鍛えてきたので時間内で十分に終わるという自信がありました。むしろ英作文が増えたことはプラスに作用すると思いました。

グノ生の場合、英語の傾向が変わったり、難易度が上がったりしたら、それをポジティブに捉えられると思います。

伊藤龍：初日の国語は、グノで身につけた通りに解答の方針を立てて書けたので「大丈夫！」と思えました。試験

中も平常心だったので、なんとなく終わった、という感じでした。

ところが、英語は緊張して、最初の要約にめちゃくちゃ時間がかかってしまいました。「ヤバイなぁ、どうしようか」とそのときには思いましたが、英作文が２つともすらすら時間をかけずに書けたので、ここで気持ちを立て直せました。

森：今年の英語の難易度がどうとか、量が例年と比べてどうとか、私は気づいていませんでした（笑）。試験が終わってから、東大を受けた人のお母さんから私の母に電話があったんです。「今年の東大は英語が難しくてうちの子がへこんでた」と。それで、母も心配になったらしいんですが、「グノでやっていたことの方が難しかったから、多分、大丈夫」と私は母に言いました（笑）。とにかく試験会場で焦るということは全くなかったです。



平山（ひらやま）　博康（ひろやす）さん（文Ⅱ・開成出身）

平山：長くグノの英語に通っていたおかげで、高３のときにはグノの復習だけでよくなっていたので、他の科目に時間を使えたことが大きかったです。

あと、僕も過去問を１年分くらいしかやっていなかったので、傾向が変わったということに気づきませんでした。特別焦ることもなく、いつも通りの気持ちで試験に臨めました。

鐘ヶ江：模試でも、本番でも、いつも英語の前になると「さぁ、英語だ」と強気になれたのはすごく良かったです。傾向が変わったのも、「英語が変わったんなら、まぁ、いいんじゃない」という感じで、グノで培われた対応力は精神的な支えになりました。

それから、グノで毎週要約をやっていたおかげで、要約には自信を持っていました。本番でも解答を書き終わった直後に「これは結構自信作かな」と思っていました。

《後輩たちへのアドバイス》

伊藤龍：勉強のやり方は人それぞれだと思いますが、僕の場合は、長期、中期、短期の計画を立てていました。まず、１年を見通して目標を決めて、そのためには今月は何をしなくてはならないか、さらにもっと小さく刻んで、今は何をすべきか、と考えて、目の前の計画を確実にこなしていくようにしていました。

平山：僕も、１年間くらいの大きな枠で目標を決めて勉強に取り組むことは大事だと思います。

あと、自分なりの勉強法を早めに確立した方がいいと思います。うまく勉強できていない科目については、自分で悩むよりも、いろんな人のやり方を聞いて実践してみて、自分に合うやり方を早く見つけるべきだと思います。

黒木：先生の意見を素直に聞いて、まずはやってみる、というのが成長につながると思います。先生たちは自分よりも遙かに長い経験をお持ちなので、迷いが生じたら先生に聞いてみて、それを信じてやってみることです。やってみて自分に合わないものなら、途中での軌道修正が必要ですが、自分の考えだけにこだわっていると成長できないように思います。

鐘ヶ江：周りの人に影響されすぎないことも大切だと思います。やっぱり、自分の信じた勉強法を貫かないと成果が得られないと思います。

それと、勉強は楽しむべきです。僕の場合は、グノの英文を読むのを一番の楽しみにしていました。机に向かわなきゃとは思わずに、結構、ベッドで勉強していました。



鐘ヶ江（かねがえ）　宏（ひろし）さん（文Ⅰ・開成出身）

森：これは自分の反省を踏まえてのことなんですが、自分と向き合うことが絶対欠かせないと思います。たとえば、模試の結果が悪かったときに、「できることはやったんだから」と開き直るんじゃなくて、自分がやってきたことを否定する心の強さが要ると思うんです。自分の傷口に、塩を自分で塗るみたいで辛いんですが、自分の至っていない部分をしっかり分析して改善していくこと、つまり、変える勇気を持つことが大事だと思います。

山田：私は、友だちと自分を比べて自信を失いかけたことがあったんです。特に秋頃に伸びを感じられないと精神的にも辛いので、志望校を落とそうかと考えてしまう人もいるかも知れません。でもそこで諦めないで、自分が掲げた目標に最後まで向かっていくことが大事だと思います。心の中ではダメかもしれないと思っても、目の前の勉強は投げ出さないでやっていくのがいいと思います。諦めたいという自分の中の囁きが聞こえても、「諦めたら後で必ず後悔する」と言い聞かせて、自分自身を叱咤激励してください。

7期生 合格者インタビュー

東大理系

[座談会出席者]（50音順、本文中敬称略）

Part 1



伊藤（いとう） 智洋（ともひろ） さん
（理Ⅰ・駒場東邦出身）



阪上（さかがみ） 遼（りょう） さん
（理Ⅰ・駒場東邦出身）



佐藤（さとう） 柚花（ゆずか） さん
（理Ⅰ・女子学院出身）



中原（なかはら） 健一（けんいち） さん
（理Ⅰ・駒場東邦出身）



西村（にしむら） 智之（ともゆき） さん
（理Ⅰ・駒場東邦出身）

Part 2



飯野（いいの） 隼平（しゅんぺい） さん
（理Ⅰ・浅野出身）



尾亦（おまた） 恭輔（きょうすけ） さん
（理Ⅰ・立教新座出身）



加藤（かとう） 快（かい） さん
（理Ⅰ・開成出身）



北村（きたむら） 太一（たいち） さん
（理Ⅰ・開成出身）



林（はやし） 佑樹（ゆうき） さん
（理Ⅰ・麻布出身）

7期生 合格者インタビュー 東大理系 Part 1

伊藤（いとう） 智洋（ともひろ） さん（理I・駒場東邦出身）
阪上（さかがみ） 遼（りょう） さん（理I・駒場東邦出身）
佐藤（さとう） 柚花（ゆずか） さん（理I・女子学院出身）
中原（なかはら） 健一（けんいち） さん（理I・駒場東邦出身）
西村（にしむら） 智之（ともゆき） さん（理I・駒場東邦出身）

普通だと、家で予習して塾ではその解説だと思うんですけど、グノでは最初にプリントを渡されて演習をして、提出した答案はすぐに添削してもらえて、新鮮なうちに解説も受けられるというのが、本当に驚きでした。

西村（にしむら） 智之（ともゆき） さん（理I・駒場東邦出身）

《入塾のきっかけ》

佐藤：高３になる前に英語の塾を探して、ネットで評判を調べてみたり、学校での評判を聞いたりしていくつかの塾の春期講習に通ってみたんです。どこの授業にも満足できずに、もう英語は塾なしでやろうかとも考えながら、最後に受けたのがグノでした。

グノの授業の進め方は他とは全然違ったんです。まず教材の内容がすごく面白かったし、ひとつの単語が、語源をもとにどんどん他の単語へと広がっていきました。１回の授業でプリントに書き込みがいっぱいになって、なんて密度が濃くて楽しい授業なんだろうと感動しました。



中原（なかはら） 健一（けんいち） さん（理Ⅰ・駒場東邦出身）

中原：高２の夏までは大手予備校の英語を取っていましたが、英文を細かく分解して文法的な説明ばかりでなかなか先に進まない授業だったんです。それがしっくりこなくて、別の塾を探し始めたときに、多くの同級生や先輩から「英語ならグノ」と勧められました。それで入ってみたら「大当たり！」（笑）。

阪上：僕も以前は大手予備校に通っていましたが、一文ずつ「これがＳで、こっちがＶ、この形容詞節が後ろからかかって」と延々と解説しているので１回の授業で数行しか進んでいないという、僕には信じられない授業でした。そのときに中原くんからグノの話を聞いて、その話を聞くだけでも「これしかない！」と確信しました。実際、冬期講習に参加してみたら、まさしく大当たりでした（笑）。

西村：そんな頃に、僕も他の駒東生から「英語ならグノがいい」という評判を聞きました。その人たちの英語の成績が良かったので僕もグノに移ることにしました。

伊藤智：僕はみんなより早くからグノで英語を勉強していました。高１の冬からです。中学時代は英語が得意でしたが、高校に入ってだんだん低迷し始めていました。そこで「塾に行かなきゃ」と思い探していたところ、別の友人から「グノがいいよ」と勧められて講習を受けて「ビビッ！」ときました（笑）。

量の多さも授業のスピードも刺激的で、最初の授業が終わった瞬間から、「実力が少し上がった！」と実感して、「もっとここでやりたい」と思いました。

《グノーブルで感じた驚き》

伊藤智：グノに来て初めて、語源までさかのぼって語いを増やしていくとか、英文を前から読んでそのまま解釈していくといった英語の勉強法を知って感動しました。英語への考え方がすっかり変わりました。

他の科目で予備校の授業を受けに行って、別の驚きを感じたこともありました。「こんなに大人数で授業をするんだ」って。後ろの方に座ってしまうと板書も見えなくて「やっぱり少人数じゃなきゃダメだな」と思いました。

佐藤：最初に感じたのは周りの人のレベルが高い、ということです。先生から当てられた人が答えていく様子を見て「自分は出遅れている」と感じました。でも、「この授業についていけたら絶対に実力がつく」とも思いました。

先生のパワーも驚きでした。英作文の授業から読解に移るときに、先生が「ごめんね！遅くなって！」と言いながらダッシュで入っていらしたんです。その日の私は少しゆったりした服でドア近くに立っていたんですけど、その服にフワッと風圧を感じました。授業の解説もそのパワーそのままでした（笑）。



伊藤（いとう） 智洋（ともひろ） さん（理Ⅰ・駒場東邦出身）

阪上：先生が生徒の顔と名前をすぐに覚えてくださることは衝撃でした。授業中の僕たちの言動や答案に関しても先生はよく記憶されているので、「成

長したい」というこっちの思いがかき立てられて、必死で勉強できました。

西村：グノは普通の塾とは授業のスタイルが違います。普通だと、家で予習して塾ではその解説だと思うんですけど、グノでは最初にプリントを渡されて演習をして、提出した答案はすぐに添削してもらえて、新鮮なうちに解説も受けられるというのが、本当に驚きでした。



さかがみ　りょう
阪上　遼 さん（理Ⅰ・駒場東邦出身）

阪上:それには僕もびっくりしました。本当に斬新な授業スタイルだと思います。毎回その場で解いてすぐ添削してもらえるのは素晴らしいことです。

西村：最初のうちは量も多くて解ききれなくて、「ついていけるのかな」と少し不安に思ったことを覚えています。それまでの塾ではもっとのんびり受けていたのですが、そのペースでは全然ついていけなくて、身が引き締まる感じでした。グノの量とスピードは全然別物だと思います。

中原：僕は、授業の緊張感が一番違うことだと思います。大きな教室で先生が一方的に話している塾だと、つい受け身になってしまいますが、グノだと先生から当てられるのでちゃんと考えようと思えます。

阪上：当てられるのはいいことなんですけど、やっぱり初めて当てられたときは、体が飛び上がるくらいビクッとしました（笑）。

佐藤：私も最初の頃は、先生が教室を見渡すと思わず目を伏せていました(笑)。

西村：僕も、「当ててくれるな！」と心の中で叫んでいましたが、なぜかそういう時に限って当てられることもあって（笑）、結局、当たることに慣れさせられます。

阪上:でも、こっちもだんだん成長して、徐々に当てられるのが楽しみになって来るんです。最後の方は記号問題しか当てられないと残念に思えて（笑）。

中原:僕は分かったときには、「分かってるよ」って表情して待ってることもありました（笑）。

《グノーブルの英語の面白さ》

伊藤智：高３になるとグノは１回の授業で、様々なテーマの英文を演習用だけで３つくらい読みますが、何を読んでも面白く、「今日はどんな内容だろう」と毎回授業が楽しみでした。英語はそもそも言語なわけで、教養を深めたり見識を広げたりするための道具なんだと改めて気づかせてくれました。

単語や文法についても、興味をそそるような指導をしてくださいました。ただ暗記すればいいというのではなく、言語としての深みみたいなものを知った気がします。

西村：グノの英文は本当に多彩です。環境問題や哲学や芸術、最新の研究発表など、僕らが普段あまり触れないような事柄を、英文で知ることができました。

それから時事問題、僕はあまりニュースを見ていなかったのですが、グノの英文で「あ、こんなことが起きているんだ」と知るようなこともありました。先生が分かりやすく解説をしてくださったので理解も深まりました。

中原：ある出来事が起こって、それが授業の教材となって出てくるまでが早いんです。ヒッグス粒子もｉＰＳ細胞も話題になったらすぐにそれを英文で読めました。マララ・ユスフザイさんのことはまず、グノの教材で知って、その後で世の中で話題になっていたような感じでした。

阪上：英文の内容の面白さはもちろんですが、僕は単語の語源の話が面白かったです。語源をさかのぼって語いを増やしていくというグノ独自のやり方は前々から聞いていたんですが、実際に授業を受けてみて「これはすごいな」と。もう、これだけでも毎週出席する価値があると思えました。

同じ単語でもいろんな意味で使われますが、そのように意味が派生していった背景をグノの先生は分かりやすく説明してくれるので、僕たちの頭の中に定着しやすいんです。単語帳のように英語の意味を日本語の訳で覚えていくやり方では絶対にそこまでは理解できません。

グノの授業のような本が市販されてないか探してみたこともあるんですけど見つかりませんでした。多分そんな本はないんだと思います。



さとう　ゆずか
佐藤　柚花 さん（理Ⅰ・女子学院出身）

佐藤：グノの先生は話をするのが本当にお上手です。私は家が遠かったのですが、グノの延長授業をいやだと思ったことは一度もありませんでした。グノの授業にはもちろん緊張感があるんですが、先生が適度に、和やかで楽しめる話を盛り込んで、メリハリをつけてくださっていました。

英文の解説の途中で、先生がその英文に関わる話をしてくださって、それが本当に興味深いんです。ちょうど「疲

れてきたな」と思っているところでタイミングよく面白い話が聞けるので、集中力が切れませんでした。それに、それは全然無駄な話じゃなくて、それを聞いているからこそ英文の内容がよく理解できて、復習のときにも効果が上がりました。

《これは良かったと思えた点》

佐藤：私は高３の５月まで部活をやっていて、予習、復習にあまり時間がかけられなかったんです。グノの場合は、その場で演習するスタイルだから予習は要らないし、宿題は多分３時間もかければできるぐらいでそんなに量が多くなかったので、部活と両立できて良かったです。

他の塾に行っている人の中には、学校にまで塾の宿題を持って来て内職していて、それをやっているから結局学校にもついていけないという人もいました。私はそういうことはしたくなかったので、効率よく英語の成績を伸ばせるグノのスタイルは良かったと思っています。



にしむら　ともゆき
西村　智之 さん（理Ⅰ・駒場東邦出身）

西村：先生がクラス全員の名前を覚えてくれるのが早いので、それがすごく嬉しかったし、先生と生徒の距離感みたいなものが他の塾より相当近いと思いました。あとは、同じ学校の友だちが大勢いたので楽しく授業に臨めた部分もあります。

伊藤智：塾に入ってすぐに先生が名前を覚えてくださると、僕たちも「しっかり勉強しなきゃ」という気持ちになれます。

佐藤：よく他の塾に行っている人の話を聞くと、「チューターさんとは仲がいい」と言うんですが、先生との距離が近いということは聞きません。でも、チューターさんより先生の方が圧倒的にいろんなことを知っているわけで、グノの場合は直接先生に質問も相談もできる良さがありました。

阪上：先生たちは本当に生徒思いです。体育祭で休んだ日のプリントを解いて提出したときも、僕は一週間後に返してもらえればいいと思っていたのに、先生が「今いっしょに見ましょう！」とおっしゃって、その場でいろいろ気づいたことを言葉でも伝えてくれながら添削をしてくださいました。

中原：グノの授業を受けていると、英語を受験勉強の１つとしてやっているんじゃなくて、使えるツールを磨いているんだという気持ちになれました。先生からインターネットで面白いサイトも教えてもらって、そこから実際に、新しい情報を英語でどんどん入手できるようになりました。英語での情報収集が習慣化したことで、ますます英語力も上がりました。グノに来たおかげで、英語という大切で役立つツールが手に入ったわけで、そのことには本当に感謝しています。

阪上：受験の範囲を超えて、本当に使える英語力を磨いてくれる塾だと思います。大学受験では、読む、書く、聞くの３つの力しか試されません。でも、グノで一番重視しているのは、口を使って音読することなんです。口を使って実際に話すことで受験のための英語力も伸ばせますし、大学に入ってさらに英語力を上げていく土台作りもやっていただいたと思っています。

伊藤智：グノで勉強したおかげで英語を使うことが苦でなくなったというか、僕も先生にインターネットのサイトを教えてもらって、受験間際で忙しくて新聞も読めないときには、英語でニュースに触れていました。受験の英語は、使える英語の一部の力が試されているわけですから、普通に使える英語力が上がっていれば受験の英語はそこまで難しくないわけです。グノで一つの言語としての英語が身についたというのは大きいですね。



なかはら　けんいち
中原　健一 さん（理Ⅰ・駒場東邦出身）

佐藤：実際、東大の問題より、グノでやっている英語の方が難度が高いんです。私の場合、グノだと演習の時間内に終わらないんですけど、センターが終わってから東大の過去問解いてみたら、「結構時間が余る」と感じました。グノで時間に追われてやっていたのはとっても良かったと思いました。

伊藤智：本当にそうで、周りの人からは東大の英語は時間が足りないと聞かされていましたが、実際はそんなことはありません。時間に追われる人は、英文を前からスラスラ読めてなくて、返り読みしているからだと思いました。問題の内容自体もグノの方が難しいので、グノのやり方で勉強していれば、英語は得点源にできると思います。

阪上：僕も英語は自信がありました。グノの毎回の教材と東大の問題を比べてみても、分量は全然グノの方が多いし難しいので、僕も授業の演習内では解き終わりませんでしたが、本番のときは10分近く余りました。

英語はあくまでも言語なので、言語としての英語力を上げていれば、どんな問題が出てもあわてることはありません。グノはそうした視点で英語の授業をやっているので、東大であれ私大であれ、どんな角度から出題されても難なく解けるのだと思います。



佐藤（さとう）　柚花（ゆずか） さん（理Ⅰ・女子学院出身）

佐藤：理系の科目は学校によって傾向の違いがあると思いますが、英語の場合は基本的な力がついていれば、どんな傾向の問題が出ても対応できる教科だと思います。私は東大だけでなく私大も受験しましたが、そこでも時間は余りましたし苦労することはありませんでした。大事なことは、しっかりした土台づくりだと思います。

《グノーブル効果を上げる秘訣》

中原：英語はグノの教材だけで他には何も必要ありません。膨大な宿題もありませんし、単語帳を全然使わなくても、必ず英語の力は向上します。ただ、授業の復習は欠かせません。いくら有意義な授業を受けたとしても、その後の復習をしないと自分の力にはならないと思います。でも、その復習を、「音」を使って効率的に行える音声教材まで揃っているところもグノの良さでした。

佐藤：徹底的にグノのプリントを見直すことです。他の問題集とかも一切買っていません。プリントだけ見れば文章の内容と一緒に単語も覚えられるので、プリントをいつも持ち歩いていました。あと、音読も寝る前には必ずやっていましたが、全部のプリントを最初から読み込むというのではなくて、たまたま手に取ったプリントを寝る前の楽しみとして音読していました。

西村：僕には少し飽きっぽいところがあるので、音読のやり方にいくつかのバリエーションを持っていました。GSL を聞きながら合わせて音読、普通の音読、それからプリントを見ないシャドーイングとかです。やり方を変えることで気分が一新するので、そうやって、できるだけ多く英文に触れるようにしていました。

中原：僕も GSL を使った音読だとか、シャドーイングだとかは毎日やっていました。iPod にも GSL を全部入れてあったので、電車の中ではランダム再生にして活用していました。

阪上：僕もプリントの音読は毎日必ずやっていました。高２の冬の頃は英語に苦手意識があったので、その頃は休みの日には丸一日使って授業の復習を徹底的にやっていました。３～４時間くらい延々と音読もしていました。僕の場合、音読は全く飽きなかったので、ひたすらやりました。ひたすらやっていると、だんだん英語のリズムが頭に入ってきて、頭が英語の流れになじんできます。

伊藤智：僕はジッパーがついたクリアファイルにプリントを入れてお風呂の中に持ち込んで音読をしていました。音読も GSL も、ペンを持つ必要がありません。自分がその気になれば、お風呂の中とか電車の中とか勉強する場を広げられます。今までボンヤリしていた時間を英語に当てられれば、他の科目の時間を減らさずに英語の勉強時間を増やせます。

《学校でのグノーブルの評判》

西村：ここにいる彼らがしっかり実績を出していて、学校の月例テストで名前が出る人たちはグノの人が多くて、「グノ、すげえ！」みたいな感じでした。ここにいる３人も常連で（笑）。それで僕も「グノにいこう」と決めました。グノの英語の評判は本当に良かったです。

中原：僕たちの学年の駒東には「グノ勢」という言葉があって、学校のテストで発表される英語の成績優秀者の多くが、その「グノ勢」でした。

阪上：駒東内で「グノ勢」の存在感は大きかったと思いますね（笑）。僕らの学年を問わず、「グノ勢」と言えば通じるようなところがありましたし。グノの英語は有名でした。

伊藤智：僕が入ったときはそれほど大勢いなかったのですが、それからどんどん駒東生がグノに入りだして、グノでばったり会って「え、いつの間に入ったの？」ということが随分ありました。



阪上（さかがみ）　遼（りょう） さん（理Ⅰ・駒場東邦出身）

阪上：誰かグノに通っている人に話を聞くと「いいな」って思えるじゃないですか。それで入ってみると実際に良くて、周りの人もどんどんグノに入っていってました。

佐藤：女子学院では大手の塾に行っている人が多くて、グノは多数派ではありませんでした。でもグノに通っている人は、明らかに英語がよくできていたので有名ではありましたね。

《東大受験で役立ったこと》

佐藤：先生が最新の科学記事の英文をよく扱ってくださいました。直前講習

では、シカゴ大学のテスト不安への対処法の研究を紹介した記事をやりました。その記事にあった通りのことを私も試験前にやってみました。

西村：僕もその英文にあった通り、自分の不安な気持ちを紙に実際に書き出してみました。かなり気持ちが楽になって、実際に試験にも平常心で臨めました。でも、多分、これまでグノで培ってきた英語力に心の底では自信があったからだと思います。自分がやってきたことは間違いないんだという強い気持ちも持っていたので。



にしむら　ともゆき
西村　智之さん（理Ⅰ・駒場東邦出身）

佐藤：以前の授業で、「緊張すると呼吸が浅くなるので、頭が酸素不足にならないように深呼吸！」と聞いていたのでそれも実際にやりました。「ああ、今私の脳に酸素が行ってる」と感じながら気持ちを落ち着かせていました。私の場合、数学と理科が微妙で、ちょっと青ざめた感じだったんです。それでも最後の英語には自信を持って臨めたので結果が伴ったんだと思います。

中原：英語には絶対の自信があったので、英語の前は全然緊張しませんでした。

阪上：今年の東大英語は形式が変わっているところがありました。たとえばパラグラフ整序がなくなったり、英作文が１つ増えたり。でも、これまでの出題傾向をあまり意識せずにグノで英語を学んできたので、動揺はしませんでした。過去問中心の勉強をしてきた友人の中にはパニックになったという人もいましたが、僕は全く大丈夫でした。

伊藤智：パラグラフ整序の代わりに出た空欄補充の形式は、よく「お帰り問題」でやっていたものなので、別に焦ることもなく対応できました。グノで英語を勉強してきた人は、傾向がどんなふうに変わっても焦る必要はないと思います。

今年は数学が難しくて僕も失敗してしまったのですが、「最後には英語があるから」と前向きになれました。理系で英語が得意という人は少ないと思うので、そこは大きなアドバンテージになったと思います。

《後輩たちへのアドバイス》

佐藤：あまり早くから東大を意識してしまうと、過去問をやらなきゃとか焦りが出てしまうと思います。それより、あわてないで英語力を根本から上げていこうという姿勢で臨んだ方が、着実に力がつきます。過去問はセンターが終わってからでいいと思います。私も２年分しか解いていないので、焦らずに、楽しんで勉強して欲しいと思います。

西村：英語に関してはグノに任せていれば間違いありません。それと、勉強全般で言えば、短い期間で計画を立てて勉強することが大事だと思います。明日はこれをやろうとか、長くても１週間分くらいの計画を立てて、それをしっかりこなしていくといいと思います。短期計画なら、何かが起きても修正も簡単です。

中原：グノの英語に通っている人は、先生が言う通りに勉強すれば間違いありません。焦っていろんな参考書に手を出して復習が疎かになるのは絶対に避けて、グノで言われる勉強を続けていれば、いつか力が急激に伸びるのを実感できるはずなので、焦らずにやってください。

阪上：本当にその通りです。グノの授業をしっかり受けて復習していけば、確実に英語の力はつきます。最初は前から英文を読んで理解していくことを難しく感じる人もいるでしょうが、ある日突然読めるようになるはずです。僕の場合も夏にそれを実感しました。夏の東大模試のときに、気がついたら英語を英語のまま解釈できていて、「あ、英語が読めるようになってるわ」と思いながら解いていました。

あと、勉強全般のことでアドバイスするとしたら、１秒を大切にして勉強することです。１日の計画を立てた場合、朝起きて、朝食をとってなどと、いろいろ書き出していくと、項目が１０とか１２くらいあるんです。そして、その間隔が５分空くと１日で１時間くらいの時間になります。１時間あれば結構いろいろできます。１年に換算すれば３６５時間です。夏の勉強目標は５００時間くらいなので、それと比較してみても、ものすごい量の時間を捻出することができます。



いとう　ともひろ
伊藤　智洋さん（理Ⅰ・駒場東邦出身）

伊藤智：受験って楽しんだ人が勝つと思います。僕は物理が全然できなかったんですが、高３の秋頃にやっと面白さに気づいたんです。そうしたら今までの苦手意識が嘘のようになくなって、積極的に勉強に取り組めるようになりました。難しいと思っていると、当然やる気も起きませんが、いったん「面白いな」と思えたら、俄然やる気が湧いてくるので、「この科目は苦手だから」と逃げないで、理解できるようになるまで取り組むことが大事だと思います。

7期生 合格者インタビュー 東大理系 Part2

飯野（いいの） 隼平（しゅんぺい） さん（理I・浅野出身）
尾亦（おまた） 恭輔（きょうすけ） さん（理I・立教新座出身）
加藤（かとう） 快（かい） さん（理I・開成出身）
北村（きたむら） 太一（たいち） さん（理I・開成出身）
林（はやし） 佑樹（ゆうき） さん（理I・麻布出身）

前の予備校では授業中に当てられることは絶対にありませんでした。当てられることに慣れていなかったので、最初は、分からないところが出てきたらなるべく先生と目を合わせないようにしていました（笑）。でも、この緊張感があるからグノの授業はすごく締まっているんだと思いました。

林（はやし） 佑樹（ゆうき） さん（理I・麻布出身）

《入塾のきっかけ》

尾亦：新中１生向けの「スタートダッシュ講座」から数英両方を６年間グノで習いました。兄が先に入っていたことと、母もグノを信頼していたため、グノに通うのが当たり前になっていました。

北村：もともと英語が苦手で、高１の頃に英語ができる学校の友だちに相談したら、彼は中３からグノに入っていて「すごくいいよ」と勧められたので講習を受けてみました。

英単語の覚え方とか、授業のやり方が本当に気に入ったので、絶対グノで勉強したいと思いました。



加藤（かとう） 快（かい） さん（理Ⅰ・開成出身）

加藤：高２までは東大専門塾に行っていましたが、英語が全然伸びなくて、僕も学校の友だちに聞いたら「グノがいい」と勧めてくれたので移ってきました。

前の塾は宿題が多くてそれが大変でしたが、グノの場合は、授業で演習して解説を受けて、そこで理解したことを復習しながら英語力を上げていく形式だったので、こっちの方が自分に合っているなと思いました。

林：僕も友だちに勧められて高３から入りました。高２までは大手の予備校に通っていましたが、そこの教え方が自分に合わなくて、高３からは違う環境で英語を勉強してみたいと思って友だちに聞いたのがきっかけでした。

飯野：僕は母の勧めです。高２の秋に文化祭や体育祭が終わって、「さて、受験勉強を始めよう」と思っていた頃に、母から「グノーブルという塾がいいらしいから入ってみたら」と言われたんです。僕は塾なんて効率が悪そうだし、行くつもりはありませんでしたが、とりあえず高２の冬期講習を受けてみました。そうしたら、授業の進め方がすごく気に入ったし、自分じゃとてもこの効率で勉強はできないと思ったので入ることに決めました。

《グノーブルで受けた衝撃》

加藤：教え方の質が全然違いました。前の塾は、先生が和訳や答をさぁーと読んで、あとは自分でやっておきなさいという授業でしたが、グノはしっかり教えてくれました。英単語の意味の推測の仕方だったり、一つの単語が出てきたら、その単語の語根からどんどん別の語へと広がっていったりして思わず惹きつけられました。

それまでは、英語の授業はこっちが頑張って集中するものだと思っていましたし、気がついたら集中していたなんて経験はしたことがありませんでした。グノは授業のスピードも適度に速くてちょうど良かったです。

飯野：「こんなに楽しい英語の授業があるのか！」と、初めてグノに来たときには本当に驚きました。

そもそも高２でグノに入る前は、「英語＝暗記教科」という思いがあり、大嫌いだったんです。グノでは、まず、英単語の丸暗記をしなくていいと言われました。単語の解説を授業を聞いていると、その展開が面白かったし、英文を音読しながら復習していると単語の意味もどんどん頭に残っていって、英語は暗記科目ではないということが分かりました。

楽しいと思って勉強していたら、どんどん英語が読めるようになって、読めるようになるとさらに英語が面白くなって、気づいたら英語が一番の得意科目になっていました。



北村（きたむら） 太一（たいち） さん（理Ⅰ・開成出身）

北村：高１で入ったとき、授業で扱う英文の難度に衝撃を受けました。高１の頃に、すでに東大の和訳問題が授業で使われていたらしいんです。英文を眺めながら、どの順番に訳せばいいかを考えようとしていたら複雑過ぎて見当もつきませんでした。

ところが、先生の解説を聞いている

とちゃんと理解できました。先生は、前から順に読んで区切りごとに意味を言ってくれましたが、それを目で追っていくと、しっかり分かるんです。これが自分にとっては驚きでした。先生の言う通りにやっていれば、本当に実力がつくんだと確信しました。



林（はやし）　佑樹（ゆうき）さん（理Ⅰ・麻布出身）

林：最初に受けた衝撃はいくつもあります。まず、授業の延長が長いこと。でも、長いのに気にならないこと。先生の熱意がすごいこと。それから、授業中に当たることなどです。

前の予備校では授業中に当てられることは絶対にありませんでした。当てられることに慣れていなかったので、最初は、分からないところが出てきたらなるべく先生と目を合わせないようにしていました（笑）。でも、この緊張感があるからグノの授業はすごく締まっているんだと思いました。

それから、英文を返り読みしないのも衝撃でした。予備校ではさまざまな記号をつけて構文解析するのが英文解釈の中心で、それを全くしない授業は、本当に目からウロコでした。

尾亦：僕は中１からグノなので衝撃体験と言われても、正直何も思い浮かびません。スタートダッシュ講座で授業を受けたときは実質まだ小６でしたし（笑）。ただ、始めから勉強が楽しかったというのは、今から振り返ってみると、実は驚くべきことだったかもしれません。楽しんで勉強しているうちにクラスも上がりましたし、特に数学は面白い問題をたくさん用意していただけたので、どんどんのめり込んでいきました。

《これは面白いと思った点》

加藤：僕は授業で当てられること面白かったし、毎回すぐに添削してもらえ、点数やコメント付きで返却してもらえることが楽しかったです。勉強に向かうモチベーションが上がりました。授業もテンポがいいので、グノの授業は眠くならないんです。延長も同じ授業料でお得だと考えていました。

林：当てられることが恐くて先生と目を合わせなかったと言いましたけど、それは最初だけです。グノの授業の様子が分かったら、逆にスリルがあって楽しくなりましたし、ちゃんと答えられるよう、演習も、授業の復習も真剣にやりました。

お帰り問題は、周りの人との競争が好きでした。なるべく早く終わらせて帰ろうとしていました。競争心とか向上心とかが芽生える刺激を、グノの授業からもらっていました。

北村：グノの英語は広がりがあるところが面白いんです。英文の背景や、使われている単語の由来について先生がどんどん話してくれます。自分の知らない分野や世界のことをたくさん教えてもらえて楽しかったです。

飯野：グノに来る前には、訳は分かってもその文の意味が分からないということがよくありました。中身が理解できないのに覚えることが多くて、それで、英語を好きになれなかったのだと思います。

グノの授業では、その文で筆者が何を言いたいのかをかみ砕いて説明してくれます。例を出して分かりやすく教えてくれるので、「あ、こういうことか」といつもすっきりしました。

そのうちに、英語の考え方と日本語の考え方はかなり違うから、訳していくだけでは理解できないことがたくさんあるんだと、グノの授業を通して気づきました。

その考え方の違いという点に気づいたら、英単語や熟語の有機的な解説もさらに面白くなりました。

尾亦：数学の話なんですが、グノの数学が面白いのは、先生が本当に近いからなんだと思います。僕たち一人ひとりが伸びていくのを本当に期待してくださっているのが伝わったので、「期待に応えたい」という気持ちになってこっちも一生懸命になれました。

できるようになってきたら、解くのが面白くて難しい問題も次々出してくださったので、どんどん数学が好きになっていきました。



尾亦（おまた）　恭輔（きょうすけ）さん（理Ⅰ・立教新座出身）

《ここは良かったと思えたこと》

加藤：音読こそが英語の土台をつくるということを教えてくださったことが良かったと思います。最初のうちは、家で大きな声で英語を読むのも恥ずかしくてやってなかったんです。でも、英語ができる友だちは皆、「音読いいよ」って言うので始めてみたら、これが結構楽しかったんです。発音の上達もうれしかったし、音読は前から読む習慣がつくので、それで英語力が自然についていったと思います。読むスピードも全然違ってきたし、気づいたら英語ができるようになっていました。

尾亦：音読をしていると、意味を分かっ

て読んでいるのかそうでないのかがすぐに分かります。黙読だとただ読んでいるだけで意味を把握していないことに気づかないことがあるんです。音読するからこそ、頭が鍛えられていく気がします。音読で速読力もつくし、リスニング力もつくし、書く力も上がります。

それから、読んでいて楽しめる英文が多くて、教材が本当に生徒のことを考えて作られていると思っていました。高３だと音声教材も普通のと高速版の両方が用意されていて、自分の実力に合わせてレベルを上げていけました。



飯野（いいの）　隼平（しゅんぺい） さん（理Ⅰ・浅野出身）

飯野：演習中心の授業はやる気が起きて良かったです。しかも直後に添削されて、点数もコメントもいただけるので、それが励みになりました。

グノは先生との距離が近いとよく言われますが、それは、演習、採点、添削、そしてすぐに解説という中身の濃さを実現した授業形態だから言えることだと思います。

それから、先生が生徒の名前を覚えていて当てていくので、僕自身も同じ授業を受けている人の名前を自然と覚えて、「あの人すごくできる。こっちも頑張ろう」と刺激になることも多かったです。

北村：先生がすぐに名前を覚えてくださるところはやっぱりうれしいです。僕たちのことを考えて授業をしてくださっていると思えます。

それから、制度に柔軟性があって、曜日の振替は、受付に電話をするだけで気持ちよく聞き入れていただけました。学校の行事があっても授業を休まなくても済んだのでありがたかったです。

先生の方もこっちを気にかけてくださって、「最近学校忙しいの？」って声をかけてくれたりしてました。

林：グノの場合、英語を読むにしても書くにしても、英語のまま処理する頭を鍛えることに重点が置かれていたところが良かったです。以前の予備校だと、基本が日本語に置かれていて英語のセンスを磨く上ではあまり役立っていないと思っていました。

東大を受験したときにも、要約や和訳の答案を作るときには日本語も使っていましたが、それ以外のときは英語の頭のままやっていましたし、それができるように鍛えていただいたということは、これからを考えてもとても良かったと思います。

それから、教室の中に一体感のようなものがあるところも、大手の予備校とは大きな違いだと思います。周りの人たちを近くに感じられるので、その人たちの発言や回答からも学べることがたくさんありました。

先生も近いから、気になることがあれば、すぐに質問できました。

加藤：先生との距離の近さということはグノの良さを語る上で欠かせない要素です。周りには、以前やったプリントを解き直して、先生にもう１回見てもらっている人も何人もいました。人数の多い塾や予備校では考えられないような面倒見の良さだと思います。

尾亦：それは、すべての教科のすべての先生に共通していました。数学や国語の先生は、一人ひとりの机を回って適切なアドバイスをしてくださったり、授業が終わった後も気軽に質問できる雰囲気がありました。質問だけじゃなくて、よく雑談もしていました（笑）。

《英語力がついたと感じ始めた時期》

飯野：「あ、今までと違うな」と思えるようになるまでに半年もかかっていません。英語の語順のまま日本語に訳さずに解釈できているのを感じたのは、高３の５月頃で、「オッ、読める！」と思って、それ以降もじわじわと力がついていった感じです。

書くということについては、受験前に総復習していて気づいたことがあります。最初の頃の英文を読み返してみると、ミスも多いだけじゃなく、とても読みにくい英文を書いていました。その頃は、英語で考えてそのまま書いていくという習慣がまだついていなかったからだと思います。

リスニングに関しては、英語を英語のまま理解していくというのと、速い英語にもついていけるという、２点があると思います。そのどちらも手応えを感じ始めたのが夏頃です。その頃には東大のリスニングでも十分対応できるようになっていましたし、長い英文を聞き続けられるようになっていました。



林（はやし）　佑樹（ゆうき） さん（理Ⅰ・麻布出身）

林：僕もグノに入ったのは遅かったのですが、夏休みに入った頃には、読む、聞く、書く力がついてきたと思っていました。その頃からはPBS NewsHourとかVOAをインターネットで視聴して勉強時間以外でも、なるべく英語に触れるようにしていました。

北村：僕は高１から通っていましたが、ずっと音読をサボっていました。高２のあるとき、偶然上のクラスに上がれたことをきっかけに、本腰を入れて音読を始めました。風呂に入ってもクリアファイルにプリントを入れて音読をしていたら、多分、それから３～４か月くらいで伸びを実感しました。高３のときは、模試でもスラスラ読めると感じていました。



北村（きたむら）　太一（たいち）さん（理Ⅰ・開成出身）

加藤：グノに入ってすぐに運動会の時期になってしまい、しばらくは英語の勉強はやれていませんでした。理科や数学に力を入れていたこともあって、英語を本格的に始めたのは、夏期講習を受けた後でした。

でも、そこからは、プリントの見直しも音読も、真剣にやっていました。それこそ、８月から９月は、英語漬けの毎日でしたが、秋の東大模試では結構いい点がとれるようになっていました。

グノでは単語帳は使わない勉強を勧められますが、僕の場合は単語帳を整理に使っていました。グノの教材を復習しながら、そこに出てきた単語については単語帳に付箋を貼って後で見直していました。

尾亦：高２の夏前にクラスがどんと落ちたことでかなり焦って、それがきっかけになりました。それまでのプリントを引っ張り出してきて徹底して音声教材のGSLを使って復習しました。まずは、GSLを何度も何度も、意味がしっかり取れるまで聞きました。意味が分かってきたら*シャドーイングに移りました。シャドーイングになると突然、意味を意識できなくなりましたが、意味を意識しながらシャドーイングできるまで何度も繰り返しました。音読もひたすらやっていました。夏休みには１日中英語ばかりやっていたので、読む速度は上がりましたし、リスニング力も上がりました。表現が耳に残るので書く力もつきました。次のクラス分けテストで一挙に一番上のクラスまで上がりました。

それからは、毎日どこかで頭の回路を英語モードに切り替える時間を持つことを大切にしてきています。

*グノーブルお奨めの英語習得法のひとつ、音声教材GSLを聞きながら、影法師を追いかけるように発声していきます。

《グノーブルの先生》

北村：僕にとってのグノの先生の印象は、いろいろ知っていて優しくてとても尊敬できる、という感じです。塾の先生に対してそうした印象を持ったことは他にはありません。

加藤：僕は、厳しい指摘を受けたことがあって、とても刺激になりました。あれだけスパッと言ってくれる先生は他の塾でもあまりいないのではないかと思います。これも先生が近いグノならではのことかもしれません。

林：グノの先生の話は毎回内容が濃くて深みがあって聞くのが楽しみでしたけど、それ以上に、英作のプリントも、読解のプリントも、教材が本当にすごいと思っていました。これを僕たちのために毎回準備されているグノの先生たちは素晴らしいと思います。

飯野：最初に受けた授業はものすごく新鮮で、ものすごく興奮したのを覚えています。どう表現したらいいか、ちょっと言葉にならないんですけど、とにかく、これまでに受けたことのない授業で、テンポが良くて分かりやすく、全く疑問が残らない授業でした。自分で読んだときにはモヤモヤしていた英文が、先生の解説で全部見えたというか、パラグラフごとの構成やつながりがパッと見えたというか、そこですごく感動を覚えました。

尾亦：中１の頃から習った数学の先生には本当に感謝しています。毎週面白い問題を出してくださって、それを夢中でやっているうちに、「数学は面白い」ということに気づき、それでどんどん成績も伸びていきました。どんな教科でも、好きになると成績も伸びていくものだと思いますが、中学生の頃に、考えることの楽しさを教えていただけたのは大きかったです。



尾亦（おまた）　恭輔（きょうすけ）さん（理Ⅰ・立教新座出身）

高３では実践的な指導が受けられたことが印象に残っています。国語の先生からは、何をどう書くべきかという東大受験に向けて有意義な指導が受けられました。数学の先生からは、数学の定石から奇問の扱い方まで教えていただいたので、どんな問題が出ても焦らずに対応する自信をつけてもらいました。

《東大受験で役立ったこと》

加藤：音読が習慣化していたお陰で、口を動かしながら黙読していると集中できるし、意味がさっと頭の中に入ってくるようになりました。本番でも口を動かしながら読むことで長文の意味もしっかり理解できました。実は本番で、最初は口を動かすのを忘れていたので、頭の中に意味が入ってこなくて

少し焦りました。すぐに最初に立ち返って、口を動かし始め、あとは冷静に解けました。

尾亦：高３になってからの毎週の要約演習は本番でも役立ちました。最初の頃は悪い点数のときも、自分では「何でこれがいけないの？」と思ったこともありましたが、音読が習慣化して繰り返しているうちに英文の構成がだんだん見えるようになりました。また、添削されて返ってきたプリントには注意点のコメントが書いてあって気づかされる部分も多くありました。そうした積み重ねが東大の本番でも自信になりました。



飯野（いいの）　隼平（しゅんぺい）さん（理Ⅰ・浅野出身）

飯野：普段の授業形式がすごく役立ったと思います。限られた演習時間で多くの課題に取り組んできましたから速読力もつきましたし、正確に英作文を書き上げる力もつきました。東大の英語は量も多いのですが、時間は少し余りました。

北村：グノでいろんなジャンルの英文に触れられたことです。自然科学から国際関係まで本当に多岐にわたる英文を読んでいたので、どんなジャンルから出題されても大丈夫だという自信を持って本番に臨めました。今年は心理学者のジャン・ピアジェに関する英文が出ましたが、ピアジェについてもグノの授業でやったことがあったので落ち着いて問題に当たることができました。

グノでは東大に特化した授業をしているのではないところも良かったと思います。今年も少し出題パターンに変化がありましたが、普段からさまざまなパターンにも慣れていたので、焦ることなく取り組めました。

林：僕は１日目の数学でつまずいたときには不安な気持ちに襲われましたが、２日目に英語があると考えることで気持ちを立て直せました。

本番の英語では、授業で毎回やってきた要約は一瞬で終えられたし、次の問題がピアジェで、僕も、「あ、これはグノの授業でやったな」と思いながら安心して解けました。

《後輩たちへのアドバイス》

林：グノに通っていれば、英語はアドバンテージを保つことはできると思いますが、能動的な授業参加が大事だと思います。それから、解説を受けるときには、ノートを取ることに追われるのではなくて、まずは先生の話に集中して、理解を優先するのがいいと思います。

北村：勉強方法を間違えないでやることが一番大事だと思います。無駄に参考書に手を出しても意味はありませんし、どんな教科でも量をたくさんやっても、その勉強方法が間違っていたら意味がありません。自分勝手にあれこれやるんではなくて、まずは、先生に言われる勉強方法をしっかり聞いて取り組んだ方が良い結果が出ると思います。グノで言えば、音読を先生方が勧めるわけですから、それは信じて取り組んでみることです。

飯野：勉強の内容を考えることが大切だと思います。東大受験生の中には「東大の英語２５カ年」というような問題集を一生懸命やる人もいるかもしれませんが、それは学習効果を高めるために編集されている問題集ではありません。僕が過去問をやったのはセンター後に５年分だけです。それ以外の英語の勉強はグノの授業に出席することとグノの教材を復習するだけでした。

数学も自分が決めた参考書を何回も復習して完璧に自分のものにしていくという勉強をしていました。

出題傾向にとらわれすぎたり、出題形式に合わせたテクニックを磨いたりするよりも、どの教科も基礎を磐石にする勉強が何より大切だと思います。その方が、急な傾向の変化にも対応できます。



加藤（かとう）　快（かい）さん（理Ⅰ・開成出身）

加藤：東大受験に関して言うと、英語が *40 点とか 50 点しか取れない得点力ではきついと思います。英語が苦手なまま受験に突入するんじゃなくて、逃げずに１か月間、正面から向き合ってみることが大切だと思います。苦手でできないとただ悩むか、悩む代わりに１か月真剣にやるかで、展開は大きく変わると思います。僕の場合も、英語は嫌いだったんですけど、音読を続けているうちに楽しくなってきて、「英語っていいな」って思えてきたんです。

* 東大の満点は 120 点。

尾亦：絶対的に信頼できる先生を持つことです。僕の場合、それがグノの先生方でした。

それから、理数系の科目は考えることをやめないことです。解答解説や参考書にすぐに頼らずに考え続けて、意地でも自力で解決しようとする努力がときには大切です。

7期生 合格者インタビュー

医学部

群馬大（医）・千葉大（医）・筑波大（医）・
東大理Ⅲ・東北大（医）・慶應大（医）

[座談会出席者]（50音順、本文中敬称略）

Part 1



芋川（いもかわ）　智輝（ともき） さん
（東大理Ⅲ・開成出身）



館山（たてやま）　大輝（ひろき） さん
（慶應大医学部・駒場東邦出身）



濱田（はまだ）　美聡（みさと） さん
（東北大医学部・桜蔭出身）

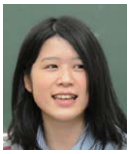


吉田（よしだ）　澪奈（みな） さん
（東大理Ⅲ・田園調布雙葉出身）



吉濱（よしはま）　れい さん
（群馬大医学部・田園調布雙葉出身）

Part 2



木下（きのした）　茜（あかね） さん
（千葉大医学部・学芸大附属出身）



須納瀬（すのせ）　裕晃（ゆうき） さん
（千葉大医学部・海城出身）



田鎖（たぐさり）　遥（はるか） さん
（千葉大医学部・桜蔭出身）



西尾（にしお）　祥郎（よしろう） さん
（筑波大医学部・城北出身）



廣田（ひろた）　安理（あんり） さん
（筑波大医学部・桜蔭出身）

7期生 合格者インタビュー 医学部Part 1

群馬大(医)・東大理Ⅲ・東北大(医)・慶應大(医)

芋川 智輝(いもかわ ともき) さん(東大理Ⅲ・開成出身)
館山 大輝(たてやま ひろき) さん(慶應大医学部・駒場東邦出身)
濱田 美聡(はまだ みさと) さん(東北大医学部・桜蔭出身)
吉田 澪奈(よしだ みな) さん(東大理Ⅲ・田園調布雙葉出身)
吉濱 れい(よしはま) さん(群馬大医学部・田園調布雙葉出身)

学校で周りを見渡しても、クラスの中には英語ができると思える人は一人か二人しかいませんでしたが、グノだとクラス全員がすさまじく英語ができる人ばかりで本当に驚きました。

芋川 智輝(いもかわ ともき) さん(東大理Ⅲ・開成出身)

《入塾のきっかけ》

館山：高２のとき、学校の友だちが急に大勢グノの英語に通い始め、その人たちが「グノはすごくいい」と言っていたし、俄然成績が伸び始めていたのに刺激を受けたのがきっかけです。それまで他の塾に通っていましたが、「伸びないな」と思っていたところだったんです。それで、高３になるときの春期講習から入りました。



芋川 智輝(いもかわ ともき) さん(東大理Ⅲ・開成出身)

芋川：英語はどこの塾にも行っていませんでしたが、高２ときに野球部の友だちだった＊長谷川くんに勧められて入ることにしました。

＊2ページから始まるインタビューにご参加いただきました。

吉濱：姉から勧められて高２のときに英語で入りました。それまでは塾に通ったことがなかったので、グノが最初の塾になります。

吉田：中３のときに、個人塾の先生に勧められて入りました。そこも英語の塾だったんですが、大学受験を視野に入れて先生に相談したら、「英語はグノーブルがいい」と勧めてくれたんです。

濱田：高２からです。それまでは違う塾で英語を受講していましたが、気分を新たにしたいと思い、学校で同じ部活の人や仲のいい友だちからグノを勧められました。

《医学を志した理由》

芋川：小学校の頃お世話になった先生への憧れが最初のきっかけです。理科が得意で、大好きな科目だったので医者になるのもいいかなという思いはずっとありました。ただ、ずっと医師を目指して頑張ってきたというのではなく、やっぱり医師を目指そうと決断したのは、高２になったときに真剣に将来の進路を考えた結果です。

理Ⅲを目指したのは、開成に入ったときから「東大に行きたい」という思いもベースにあったからです。自分の進路として医学を目指すことと、東大にも行きたいという、その２つを実現させるためには、高いハードルかも知れないけれど理Ⅲに合格するしかないと思ったんです。

館山：ずっとスポーツをやっていたので、小学生の頃から骨折などのケガが多くて近所の整形外科によくお世話になっていたんです。その先生が、小学生だった僕の話もきちんと聞いてくれるとても患者思いの先生で、それで医師に対する憧れを持ちました。僕の場合はその頃から「将来は医師になるんだ」という決心を固めながら勉強をしてきました。

結果、東京医科歯科大と慶應の両方に受かったんですが、周りの何人もの方と相談して、総合的に考えた上で慶應の医学部への進学を決めました。

濱田：私も最初のきっかけは小学校のときに入院してお世話になった先生です。幼いときには結構みんなお医者さんには憧れると思います。でも、やっぱり真剣に考え出したのは高校になってからです。今の時点では臨床と研究のどちらに進むかもまだ決めてはいないのですが、まずは医学部に行ってから、自分で興味が持てて、世界が広がりそうな道を選択したいと思っています。



吉田 澪奈(よしだ みな) さん(東大理Ⅲ・田園調布雙葉出身)

吉田：高校になって自分の将来を考えたとき、社会の中で自分の役割を果たせる仕事につきたい、と強く思い、医療の世界を目指しました。

理Ⅲということについては、父が東大出身で、「私も東大に行きたい」という思いが前提としてありました。「東大に行きたい、でも、医学部にも行きたい」という思いを実現させるためには、「理Ⅲに受かるしかない」と思い頑張りました。

ただ、両親は「医師を目指すなら理Ⅲじゃなくてもいいんじゃない」と、ずっと反対をしていました。でも、私はなんとしても両方の夢を実現させたかったので強い決意を持って理Ⅲに臨みました。

吉濱：小さい頃から生物とか人間の体の仕組みには興味があって、その方面に進みたいとは思っていました。私自身は健康に恵まれてお医者さんとの関わりはそれほどなかったのですが、高１のときに祖父母が入院してそのときの経験からやりがいのある仕事だなと思い、それで医学部を目指すことにしました。

《グノーブルで感じた驚き》

芋川：学校で周りを見渡しても、クラスの中には英語ができると思える人は一人か二人しかいませんが、グノだとクラス全員がすさまじく英語ができる人ばかりで本当に驚きました。

館山：英文読解のときに品詞分解をしなかったことです。普通の授業だと、これが修飾語で、これが主語でと解析しながら読むように習います。グノでは、英文を返り読みするのではなく、最初から意味を取っていくことが大事だと先生が強調します。「世界中の全ての言語は前から処理することになっている」と先生がおっしゃったときには目からウロコでした。



濱田（はまだ）　美聡（みさと）さん（東北大医学部・桜蔭出身）

濱田：授業とは離れてしまうのですが、グノの受付の方がすごく優しくて、電話をしてもとても丁寧に応対してくださって気持ち良かったです。私は他の塾にも通っていましたが、グノの受付の方は本当に優しいなと思っていました。

吉田：普通の英語の勉強は、単語帳を覚えたり、授業でも文法解説が中心で、英文もあまりたくさん読まずにゆっくりやっていくと思います。ところがグノでは、単語帳は使わないし、中３の頃から１回の授業で読む英文の量は普通の何倍も多いし、文を読みながら、知らない単語を覚えたり、文法事項を知ったりできることに、「こんな勉強の仕方があるんだ！」と驚きました。というか、授業が全然退屈じゃないことにびっくりしました。

吉濱：私はいろんな先生に習いましたけど、グノには合わない先生もいないし、退屈な授業が本当にないんです。どの先生も個性的ではいらっしゃるんですけど、単語は語源から説明していただけるとか、英文を語順のままに読んで意味を取っていくとか、グノにあるいろんなメソッドは全ての先生が共有されていることが素晴らしいなと思いました。

《これは面白いと思った点》

吉濱：英単語が暗記物じゃなくなったところです。単語の成り立ちまで遡って、その意味を考え、関連する単語まで知っていくという、語いの広がりみたいなものを感じられたことが面白かったです。先生が成り立ちのイメージを黒板に描いてくださったり、体を使って説明してくださったり、グノの先生はお話がお上手で、私たちの頭がそれで結構刺激されるんです。

吉田：語源の話は本当に面白かったです。単語をただ覚えなさい、というのが普通のやり方だと思いますが、グノではどの先生も本当に分かりやすく教えてくださいましたから、言葉に対して興味がどんどん湧きました。見たことのない単語でもその成り立ちから推測できるようにもなりましたし、英語的なセンスが磨かれていく感覚もありました。

濱田：１つの文章を扱ったときに、先生が話してくださる背景の話が面白くて、英語が苦手だった私には、それが授業を楽しめる要因になっていました。その英文を書いている人が何を言いたいのか、演習のときにはぼんやりしかわからなくても、先生の解説を聞くとはっきりして、「あぁ、こういうことが書いてあったんだ」と思えてスッキリしました。



館山（たてやま）　大輝（ひろき）さん（慶應大医学部・駒場東邦出身）

館山：グノの解説は、英語的な解説だけでは終わらないんです。そこから先のプラスアルファの解説が面白いんです。グノの先生は本当に幅広い知識をお持ちになっていて、それを基にその英文の内容を分かりやすくお話しいただいたので、英語で教養が深まったと思います。

芋川：僕は先生が用意してくださる英文の内容自体を、毎回楽しみにしていました。自分の知らない分野のものだったり、結構深い内容のものだったり、最新のニュースだったり、いろんな英文があったので、学校でもグノに通っている友だちと授業で読んだ英文のことをよく話題にしていました。授業でプリントが配られるときにも、今日はどんな英文が読めるんだろうと楽しみにしていました。

館山：僕の学校には「グノ勢」と呼ばれる集団がいたので、「要約何点だった？」とか、お互いの出来具合を探るような話もしていましたね（笑）。

《ここは良かったと思えたこと》

吉濱：グノは受験に必要な力をつけられるだけじゃなくて、もっと広い英語

力を目指す塾だと思います。実際に英語を使って「たくさんの人たちとコミュニケーションが取れるようになってほしい」と先生方が思っていることがよく伝わってきましたし、私もそうなりたいと思えるようになりました。



よしはま
吉濱　れい さん（群馬大医学部・田園調布雙葉出身）

吉田：授業の内容も大事ですが、それを教える先生の誠実さや授業に向かう姿勢みたいなものも大事だと思います。もし同じ内容の話だとしても、一生懸命話してくれる人の話に熱心に耳を傾けるはずです。先生が「真剣に向き合ってくれている」と感じれば、誰だって「自分もしっかりやろう！」と思うんじゃないでしょうか。グノの先生方はいつも私たちと真剣に向き合ってくださいました。

濱田：高３は１年間同じクラスの塾が多いと思うのですが、グノは１年のうちに何回かクラス分けテストがあります。私は英語が苦手で下のクラスだったので、上のクラスに上がれるのを目指して、クラス分けテストをモチベーションの向上につなげていました。

館山：個人的なことですが、駒東生がたくさんいたことです。授業もリラックスできましたし、分からないところがあれば友だちに聞くこともできました。

同じ学校から優秀な友だちがたくさん通っているということは、「あいつらには負けられない」というプレッシャーもあるということで、そんなプレッシャーがあるからこそ頑張れた部分もあります。

芋川：グノに任せておけば「英語は大丈夫」と思えたことが受験勉強をする上で支えになりました。

グノは受験対策という意味でもすべて揃っていました。東大の受験問題と同じで、グノでも幅広いジャンルの英文が扱われていたので、理系文系の枠を超えた英文にも、小説のような普段はあまり目にしない英文にも触れられました。

出題形式を考えても、要約も自由英作文も毎回あって、段落整序も文法もと、密度濃く全部やってくれました。添削も毎回やっていただけるし、グノの授業に出ていれば、まったく他の参考書や問題集の必要はありません。英語はすべてグノに任せられたので、おかげで、他の教科にしっかり時間を取ることができました。

吉田：私は東大だけでなく、慶應をはじめ私立の医学部もいくつか受けましたが、そこでもグノの英語だけで十分対応できました。英語の本質を教えていただくと「強いな」と実感しています。東大や医学部対策用の勉強ではない、もっと深い部分で英語の本質をしっかり学べたので、どんな問題にも対応できる力が養われたのだと思います。私は過去問もほとんど解いていませんでした。

芋川：僕も、グノの教材以外は英語に関しては何もしていません。それで、東大にも慶應にも対処できました。そもそも自分で面白い英文を探してくるのは大変ですし、それが正しく力になるかどうかも分かりません。毎回ワクワクできるグノのプリントを徹底的に復習して、完璧に自分のものにしていった方が確実に力になると確信していたので、グノの復習しかやりませんでした。

吉濱：私の場合は授業についていくのが精一杯で、他に何かをする余裕はありませんでした。でも、とてもレベルの高い授業だったので、「この授業についていければ大丈夫」と思っていました。最後まで完璧に消化できていたかは分かりませんが、グノの授業は本当に自信につながりました。

濱田：私は、自分の英語力に最後まで自信が持てなかったので、直前期には他塾の志望校別の講習を取ろうか迷い、先生に相談したこともあります。そのときに先生は「グノーブルの復習をすることが大切だし、それさえやっていれば大丈夫」とおっしゃったんです。その言葉を信じてグノの復習一本で最後までやり通せたのは、先生に対する絶大な信頼があったからです。いつも授業や添削で私を見てくださっている先生の言うことなんだから信じよう、という気持ちになれて、結果としては合格にもつながって、本当に良かったです。



はまだ　みさと
濱田　美聡 さん（東北大医学部・桜蔭出身）

館山：入塾して間がない頃でしたが、僕も先生に相談をしたことがあります。単語帳を含めて他の問題集をやらない英語の勉強なんて普通はないじゃないですか。入ったときから音読を続けて読むスピードも飛躍的に上がってはいたんですが、途中で不安になって相談に行ったら、そのとき先生は「グノの勉強だけで大丈夫」と、きっぱりおっしゃってくださり、丁寧に理由も話してくださったので、それを信じようと思いました。

《英語力がついたと感じ始めた時期》

吉濱：正直なことを言えば、最後まで

英語ができるとはなかなか思えなかったんです。グノにはすごい人たちが周りにいらっしゃるので。吉田さんも含めて（笑）。ただ、高３で模試を受けるようになって、常に英語の成績が全体を支えてくれていたのを見て、「ああ、いつの間にか英語が得意科目になっていたのかな」と気づきました。最終的に受験では、英語が最も自信のある科目になっていました。

吉田：グノの夏期講習は８日間で他塾より少し長いんです。中３の頃からその８日間を終えると力の伸びをいつも感じていました。普段の授業で積み重ねられた力が、夏期講習で集約的に勉強することで劇的な伸びを見せたという感じです。夏期講習をこなすたびに、英文を読むスピードが上がったなって実感できていました。

館山：グノに入る前も英語は一番の得意科目とは思っていたんですが、あるレベルで伸び悩んでいるとも感じていました。でも、高３の春にグノに入って勉強のやり方が変わって夏頃、つまり入塾してから３～４か月ぐらいで「伸びてきた！」と実感を持ちました。



芋川（いもかわ）　智輝（ともき）さん（東大理Ⅲ・開成出身）

芋川：英語力の伸びは英作文で実感しましたが、高３の秋以降のことでした。グノでは結構多くの英作文を毎週書いて提出して、それを先生に添削していただけるんです。最初の頃は点数も低くて、「どうせ英文をスラスラ書けるようにはならないだろう」とも思っていたんです。ところが少しずつ直しが減ってきて、「ちゃんとやればできるようになるのかな」と思い始めて、そこから力がついていったという感じです。

実は、秋の模試では目を疑うような悪い点数を英作文で取ってしまったことがあったんです。でも、そのとき、「英作文にまだまだ伸びしろあるということだ」とプラスに捉えて頑張ったのも良かったと思います。

多分、たくさん書いて、たくさん添削を受けてきたことに加えて、大量に読んで、聞いて、音読してという蓄積が英作文の力になったようにも思います。

濱田：私は最後まで「すごくできるようになった」という実感はなかったんですが、直前講習の要約演習で、私の中では「いい点数だな」と思えることがあったんです。そのときに先生がつけてくださったコメントが「ついにあなたの時代到来！」（笑）。自分では、私の時代が到来したという実感はなかったんですが、自信にもなりましたし、とても嬉しくて、「もっと頑張ろう！」という気持ちにもなりました。

《英語力を伸ばす勉強法》

館山：僕は音読を毎日必ずやっていました。夏休みには毎朝起きて３０分。それは効果があったと思います。英文を読んでいてもスピードが上がっているのを実感できました。

あと、音読のときに気をつけたのは、相手に伝えるような感じで読むことです。これも先生からアドバイスを受けていたことなんですが、それを必ず意識してやっていました。

毎日やるというのはなかなか大変なことです。面倒になって、「今日はいいかな」とか思うこともありました。でも、そこでくじけたら、結局それは自分に返ってくることなので、多少辛くても、そうした習慣をしっかり継続することが力をつける早道になることは間違いないと思います。

吉濱：私も真剣に取り組んだのは音読です。音読することで耳も目も口も鍛えられると先生がおっしゃっていて、実際その通りだなという実感を持っていました。「さて、勉強しよう」と気構えなくてもできるので、寝る前に音読をするのを習慣にして、それが結果につながったと思っています。



吉田（よしだ）　澪奈（みな）さん（東大理Ⅲ・田園調布雙葉出身）

吉田：私は復習より前に、とにかく授業に集中することを大切にしていました。グノの授業は情報量も多く、スピードも速いので大変なんですが、先生が読んでいくのに合わせて自分も目で追いかけながら頭をフルに回転させていました。「吸収できるものはこの場で全部吸収しよう」と思っていました。それをやっておくと復習が楽になるんです。

芋川：普段の生活習慣の中に英語を取り込んでしまうことが大切だと思います。たとえば、僕の場合、布団に入ってから眠れないこともよくあって、そんなときはグノのリスニングの教材を流していました。どうせ眠れずボンヤリしているなら英語を聞こう、というわけです。ときどきますます眠れなくなったのであまりお勧めではありませんが（笑）。

とにかく、意図的に「力を伸ばそう」と思ってやること以外にも、GSL を使えば英語に触れる習慣作りができると思います。

濱田：勉強法は最後まで確立できたとは思っていないのですが、音読は大切だと思っています。ただ、最初はその

効果がよく分からず、やめてしまったこともあったんです。少し休んでも大丈夫だろうと思っていたのですが、やめてしまうとだんだん読めなくなっていきました。私の場合、さぼってみて初めて、やっぱり音読は続けていないとダメだと実感しました。

《グノーブルの先生》

芋川：グノの先生は素晴らしいと思います。読解で出会った先生ほど勢いよく授業をする先生に出会ったことがありませんでした。知識も多岐にわたっていて豊富で、本当に尊敬しています。



館山（たてやま）　大輝（ひろき）さん（慶應大医学部・駒場東邦出身）

館山：英作文の先生の添削の速さにも驚きました。でも、その先生の授業のペースは読解の先生と違って少しゆったりしていて癒されてもいました（笑）。とにかく、授業中に書いた僕たちの英作文を、その授業内で添削して返してくださるなどいうことはグノ以外にはないと思います。

吉濱：私も読解と作文でそのお二人の先生にお世話になって、お二人がそれぞれ個性的で絶妙なバランスだったのが良かったと思っています。

濱田：グノの先生は私たち一人ひとりに本当に親身になってくださるんです。

高３の夏に最後のクラス分けテストがあったので、それに向けてベストを尽くしたくて、以前習っていた上のクラスの先生のところに勉強法の相談をしに行ったことがありました。そのときには担当の生徒じゃない私にも、本当に真剣になってアドバイスをしてくださいました。

結局、クラスは上がれず、あれだけ親身になってくださったのにと思いましたが、気持ちを切り替えて受験に焦点を合わせ、「先生のためにも結果をだそう！」と思ったんです。こういう気持ちはその先生にだけでなく、下のクラスでお世話になった先生にも同じように持っていました。

吉田：両親がとても心配性で「理Ⅲじゃなくて他の国立大を受けたら」と言われていました。秋の模試の結果があまり良くなくて、母から「塾の先生に見せて、本当に理Ⅲを受けられるか聞いてきなさい」と言われ、先生に見ていただいたんです。そのときに先生からいただいた言葉にとても勇気づけられました。やっぱり、日頃から見ていただいていた先生の言葉だったから自信をもらえたんだと思います。

《大学受験で役立ったこと》

館山：やっぱり音読です。毎日欠かさずやったことが英語の実力向上につながったと思っています。試験当日もグノのプリントを持っていって休み時間に音読をしていました。他の人に見られると恥ずかしいので柱の陰に隠れながらですけど（笑）。音読していると頭が英語のモードに変わりますし、今までグノでやってきたことが思い出されて、それで自信を持って試験に臨むことができました。

吉濱：英語の力は間違いなくグノで上げていただいたと思いますし、毎週の要約演習で論理的に落ち着いて正確に読む訓練がたくさんできました。他の教科でも論理的に考えることは大切だと思うので、その力を鍛えていただいたことは良かったと思います。

芋川：僕も毎回の要約演習に感謝しています。東大の最初の問題が要約なんですが、グノの読解の授業も要約から



吉濱（よしはま）　れいさん（群馬大医学部・田園調布雙葉出身）

始まるんです。グノでたくさんやってきたという自信もあったので、本番が始まっても順調にすべりだすことができました。

それから、東大の受験日は、グノの授業でやった要約のプリントでいい点数のものだけ会場に持っていきました。「このときは、こう考えて、こうまとめたんだな」と振り返って、頭の中にいいイメージを植えつけていました。

吉田：グノに通い続けたこと自体が、本番での自信になっていたと思います。他にはない素晴らしい環境だと私は思っていたので、その塾で中３から直前までやり続けたことが自信の裏付けになっていました。

濱田：自分の力がまだ、「志望校のレベルに足りないな」と感じていたときに、グノの先生が「大丈夫だよ」とよくおっしゃってくれていたんです。その言葉を聞けば、嬉しいんですけど「そんなことないんだよな」とも思っていました。でもやっぱり、その「大丈夫だよ」の一言は精神的な面で私を支え続けてくれましたし、今考えると、すごく助かっていたなと感謝しています。

《医学部を目指す後輩へのアドバイス》

芋川：模試などでなかなか結果が見えなくても、諦めずに頑張ることが大切です。特に英語は、すぐにできるよう

にはならないので、諦めない気持ちが一番大事だと思います。

館山：僕は、悔しさを感じたときこそチャンスだと思います。僕も、模試で自分の思った通りの点数が取れなくて悔しい思いをしたことは何度もありましたが、それをバネにして自分をレベルアップさせられたと思います。悔しさを感じても、そこで投げやりになったり挫けたりせずに、さらに努力して欲しいと思います。

濱田：私も似ているんですが、最後のクラス分けテストで上がれなかったときは「これじゃあ、もうどこにも受からない」とかなり落ち込みました。今思えば、その辛かった経験が成長の糧でした。諦めずに頑張っても結果が出るとは限りませんが、途中で諦めたら絶対に結果は出ないはずです。

あと、もし苦手科目があったなら、その科目を得意科目にするのは無理かもしれませんが、足を引っ張らないレベルまで上げようと考えれば、それは自分のできる範囲のことだと思えて気持ちが楽になります。受験は総合点で決まるので、全体のバランスを考えて勉強するといいと思います。

吉田：私は直前まで勉強して、「やるべきことは全てやった」と思って本番を迎えることができたので、緊張し過ぎずに自分の実力を出し切れたのだと思います。これから大学を受ける人たちも、直前まで自分のやるべきことをしっかりやり続けて、自信を持って本番に臨んで欲しいなと思います。

吉濱：受験をもう１回やりなさいって言われたらいやですけど（笑）、でも、受験できたということ自体にはとても感謝しています。本当に、いろんな人に支えられてきて、環境にも恵まれたからこそできたことなので。受験勉強の最中は辛いときも絶対あると思いますけど、でも、受験できるってことに感謝することもいいことだと思います。新たな力が湧いてくることもあると思います。

7期生 合格者インタビュー 医学部Part2

千葉大(医)・筑波大(医)

グノレットを読んでいる人は、ここに登場する人はもともと優秀な人だと思うかも知れませんが、僕は本当に英語ができませんでした。それでも、グノでやっているうちに、楽しくもなるし成績も上がる、と説得力を持って言えると思います。

須納瀬（すのせ）　裕晃（ゆうき）さん（千葉大医学部･海城出身）

木下（きのした）　茜（あかね）さん（千葉大医学部･学芸大附属出身）

須納瀬（すのせ）　裕晃（ゆうき）さん（千葉大医学部･海城出身）

田鎖（たぐさり）　遥（はるか）さん（千葉大医学部･桜蔭出身）

西尾（にしお）　祥郎（よしろう）さん（筑波大医学部･城北出身）

廣田（ひろた）　安理（あんり）さん（筑波大医学部･桜蔭出身）

《入塾のきっかけ》

西尾：僕は中１のスタートダッシュ講座からです。英語と数学はそのときから最後までお世話になっていました。中２から高１までは国語もとっていました。母がグノともうひとつの塾を探してきてくれて、授業の進めた方や先生たちの接し方がグノの方が良かったので、僕の意思でグノに決めました。



西尾（にしお）　祥郎（よしろう）さん（筑波大医学部･城北出身）

木下：私は高校受験が終わってすぐのフレッシャーズ講座です。兄がグノの創設時に通っていて、「すごくいい塾だ」と絶賛していたので、グノの英語を私も体験しようと思いました。

兄のときは手探りの状態で、兄自身いろんな塾を周ってから英語はグノに決め、それで第一志望に合格していました。その姿を私も見ていたので疑うことなくグノに入りましたが、入った当初から、大学受験の塾は高校受験の塾とは大違いだと思いました。音声教材を含めた教材も、授業の進め方も、先生もレベルが高くてやる気が湧きました。レベルの高さに、ちょっと圧倒された時期もありましたけど、頑張ってやり続けて本当に良かったと思っています。

須納瀬：僕も高校に上がる前のフレッシャーズ講座からです。グノには素晴らしい先生がいると聞いていたので興味を持って来てみました。



須納瀬（すのせ）　裕晃（ゆうき）さん（千葉大医学部･海城出身）

それからずっとグノの英語にお世話になりましたが、正直、現役のときは、グノの授業の本当の良さが分かっていなかったんです。結果、浪人してしまい、大手予備校に通い始めました。

グノの素晴らしさを実感したのはそのときです。ある有名講師の授業を受けることになりましたが、正直言って「これが？」という感じで拍子抜けでした。「現役のときはなんてもったい

ないことをしていたんだ」と後悔もしました。親に頼み込んでまた、英語だけは、またグノに通わせてもらうことにしました。

田鎖：私の場合、以前通っていた大手予備校の英語には満足できず、それから規模の小さな塾にも行ってみましたが、結局、どちらも自分に合いませんでした。



田鎖（たぐさり）　遥（はるか）さん（千葉大医学部・桜蔭出身）

その頃、学校の友だちがグノの教材を広げているのを見たんです。「何これ？」って聞いたら、その友だちがグノの英語を絶賛したので、あわてて授業を受けにきました。初回から驚きの連続でした。それで、高３になる間際に、再度の転塾となったわけです（笑）。

私の場合、模試での成績は悪くはありませんでしたが、英文を２度読みしなくても読めるようになりたかったんです。英文を１回読んで、それからまた日本語に訳しながら読むんじゃなくて、英語をネイティブのように読むというのが目標で、グノなら到達できると思いました。

グノのやり方は、最初のうちは頭が本当に疲れましたし、体力も必要でした。でも、いったん慣れれば英語が楽々読めて楽しくなってくるし、学校や模試など、グノ以外で触れる英語が簡単に思えるようになりました。予想以上に早く、日本語なしで英語のまま読めるようになりました。

廣田：私は、新高３のカリキュラムが始まる高２の冬期講習からでした。学校の友だちが何人か通っているのを前から知っていて、その人たちがグノの英語をすごく誉めていたので、「私も入りたいな」と思っていましたが、でも、「途中からでは入りづらいかな」とも感じていて、ときどきホームページを見ていたら、冬期講習は新高３としてスタートと書いてあったので、その機会に入りました。

《医学を志した理由》

木下：父が医師で、それがどんな仕事なのかを幼い頃から見て影響を受けていましたから、小学生の頃には、『２０歳になった私へ』というタイムカプセルに入れる手紙に、「医学部で頑張っていますか？」と書いたことを覚えています（笑）。

一時期、本当に医学部なのかなと、自問自答したこともありましたが、兄が医学部に入り、父と医学の話をしているのを見て、「私もここに入りたい」と思い、やはり医学部を目指そうと決心しました。

須納瀬：僕も父が医師で、幼い頃から漠然と医師に憧れを持っていました。僕の兄も医学部に進学しましたから、やりがいのある道だということは、ずっと身近で見てきました。

ただ確固たる思いを持ったのは浪人時代です。社会に役立てる仕事に就きたいとの思いが浪人時代にますます募り、「すべての人の人生を根底で支えるのは健康で、それを守る仕事に一生関わりたい」と心が決まりました。

田鎖：私は、お金のためとか名誉のために自分の力を使うのではなくて、自分の努力が人の喜びにつながるような仕事がしたいという思いがありました。きつくても自分が一生懸命働いて、人に本当に喜んでもらえるのは医師じゃないかなと思って医学部を志しました。

でも、高３の夏くらいに気持ちが揺らいでしまったことがありました。自分の力不足で人が命をなくすこともあり得るし、本気で医師の仕事に取り組むんだったら自分のプライベートな部分はなくなるだろうし。そんな責任の重さに不安になってしまったんです。願書を出すときにも迷いましたし、今でも恐れはあります。でもやっぱり心の底で、医師として人の役に立ちたいという思いが捨てきれません。

西尾：漠然とした医師への思いは小学生の頃からありましたが、決心したのは高１のときです。その頃に、自分が興味を持てるものは何か、どんなに辛くてもやり遂げられるものは何かを真剣に考えていました。

僕の場合、家族や親戚に医師がいるわけではありませんが、医学部に進み医師になったＯＢが学校で講演をしてくださったことがありました。そこで聞けた話は、人の命を預かる職業を目指す決意をするだけの説得力がありました。



廣田（ひろた）　安理（あんり）さん（筑波大医学部・桜蔭出身）

廣田：小６のときに、身近な人が難病にかかってしまったんです。そのときから、人が病気になるということについて考え始めるようになりました。病気は、肉体的にはもちろん、精神的にもとても人を苦しめるんだということを近くで見てきて、中３の頃に、そうした人たちの気持ちも考え、きちんと救う手立ても考えられる医師に自分がなりたいと思いました。まだ、臨床医になるか研究医になるかは決めていませんが、どちらにしてもそうした人たちの手助けができるようになりたいと思っています。

《グノーブルで受けた衝撃》

木下：入ってまず驚いたのが、「単語帳は必要ありません」と先生がおっしゃったことです。高校受験のときは、英単語を暗記することは欠かせない勉強だったのです。

英単語を語源から学ぶというグノのやり方が身についてきたら、苦労せず

に楽しんで知識を増やしていける、ということに驚きました。新しい英文を読んでいるときにも「あ、この単語、いつの間にか覚えている！」と思える瞬間があったり、ひとつの単語の意味が広がっていったり、いろんな単語がつながっていくのを楽しみながら、どんどん語いが増えていきました。

須納瀬：僕も初めてそうした学び方があることを知ったときは「すごい！」と思いました。ある言葉の語根がどんな背景から生まれてきたかとか、どんなつながりで言葉の意味が広がって多義語が出来上がっていったのかとか、授業を聞いていてもどんどん引き込まれてしまいました。

またそれを解説してくださるグノの先生方は本当に博識なんです。それに、授業中はいつも活き活きとされています。塾の先生ということではなく、人間として「こうなりたい」と思えましたし尊敬できました。



須納瀬（すのせ）　裕晃（ゆうき）さん（千葉大医学部・海城出身）

田鎖：グノに入る前に受けてきた授業では、いちいち立ち止まりながら構文を解析して英文を読んでいました。だから、自分でも構文解析をしなくてはいけないというか、いつのまにか頭の中でそれをやり始めるように習慣化していました。

グノだと、受験の英文を読んでいるんじゃなくて、まるで面白い本を読んでいくように、文章の流れの中で意味を取っていくというネイティブ的な発想で英文と向き合うことができて、とても新鮮でした。

グノのやり方で練習しているうちに、日本語は浮かんでこないけれど、頭の中で意味は分かるという不思議な感覚が生まれてきて、それが本当に楽しかったし、グノならではの授業だなと思いました。

あと、読解の先生が話してくださる、哲学や世界史、芸術などの話が面白くて、普段は、受験勉強に埋もれている毎日でしたが、グノにくると別の話が聞けることがとても楽しみでした。

西尾：僕は中１から通っていたので、特別に衝撃とは感じていませんでしたが、それでも、英語の語源からの説明は楽しいと思っていました。

高校になってからは英文の量が多くなって授業の延長も毎回ありましたが、それでも、解説を途中で打ち切られてまた来週というより、その日のうちに完結してくださるところが良かったです。授業が完結すれば、帰りの電車の中でも早速復習に入れるし、次の授業までに時間を十分使って復習できるので理解も深まります。

それから、速いスピードと密度の濃さで、授業にはいつも集中できました。

廣田：最初、授業内に演習をするって聞いて、「そんなことをしていたら時間がなくなるんじゃない？」と思っていました。ところが実際に授業を受けてみたら、「１回の授業で何十倍もたくさん大事なことが学べる！」と分かりました。周りの人は問題を解くのも速いし、先生がその場ですぐ添削して返してくれるし、今解いたばかりの問題の解説がすぐに受けられるし、常識が全部覆されていく感じでした。授業のスピードや密度も、解説の面白さも、他とはレベルが違いすぎます。生徒も先生もだらだらしている瞬間なんて全くないんです。

須納瀬：一方的に先生が講義をする授業とグノとの一番大きな違いは、一人ひとりを見てもらえるかどうかです。大手みたいに５０分授業で生徒数も１００人を超えていたら、自分が用意した答を先生に見てもらうことは不可能です。それに、要約でも英作文でもいろんな書き方ができると思うのに、模範解答だけ提示されても学習効果はほとんどないようなものです。しかも、長文読解の解説の途中で、「はい、今日はここまで」と終わってしまうとがっかりです。



木下（きのした）　茜（あかね）さん（千葉大医学部・学芸大附属出身）

木下：他だと、私たちは家で宿題をしていって、先生は一方的に解説するだけですし、その場で見てもらえるわけでも、当てられるわけでもないので、こっちもなんとなく適当に宿題をしてしまうところがあります。グノは、その場で演習、その場で添削なので「今すぐ見られちゃうんだ」と思うと手が抜けません（笑）。

田鎖：演習をして即解説という授業スタイルですごく良かったのは、解いてみて「ここ分からない」と思ったところをすぐに確認できたので、全部頭に残るところです。仮に予習を真面目にやったとしても、時間が経ってしまうと、疑問点を忘れたり曖昧になったりします。

《これは面白いと思った点》

廣田：英文の内容がほんとに幅広いジャンルに及んでいて、文系チックなものもあれば、ｉＰＳ細胞のような旬な話題もあれば、宇宙の話もあってと、いろんな分野に英語で触れられました。その上、博識な先生の話がそんな英文の題材について楽しく話してくださるのが聞けて、授業を受けるたびごとに頭が良くなった気分になりましたし（笑）、受験勉強の合間に知的な息抜きができている気がしていました。

西尾：高３の授業の場合、要約のプリントとテキストはどのクラスでも共通ですが、それ以外に２枚か３枚あるプリントは担当の先生によって中身が違



西尾（にしお）　祥郎（よしろう）さん（筑波大医学部・城北出身）

います。どの先生でも、今の話題や多岐に渡るジャンルの英文を用意してくれて、それに、どの先生も英語の解説だけじゃなくて、その英文の背景にまで話が及ぶのがすごいと思います。

田鎖：この英文は構文が難しいからみたいな理由で先生が持ってきてもつまらないですが、グノでは好きな本を読んでいる感覚で英語の勉強ができました。

１回、テレビのニュースで気になることがあって、そのときにはもっと知りたいと思いながらも受験生だからと思ってそれ以上調べることもしませんでした。そうしたら、その日の授業でそれがプリントになっていてびっくりしました。気になっていたことが、しっかりグノで吸収できました（笑）。

須納瀬：僕は浪人をしていたとき世間から距離をおいて勉強に打ち込んでいましたが（笑）、グノの授業を受けていれば世の中の旬な出来事にかなりついていけました。

それと合わせて、先生は僕たちのモチベーションが上がる英文を選んでくれていて、僕はそういう文章だけを集めたノートを作り、それを読み返しては先生の優しさがにじみ出るのを感じ、元気をもらっていました。

木下：グノの英文は復習するのが楽しみになるんです。昔の英文をあらためて取り出して読み返してみても、「先生は確かここではこんなことを話していた」みたいに授業の内容が蘇ってくるんです。単語のことも、余談的なことも、いろいろ事細かに思い出しながら復習できたので、１つ復習したら、「他の英文も読もう」と、どんどん復習するのが楽しくなって、いつの間にか時間が過ぎているということがありました。こうしたことを繰り返しているうちに、長文もスラスラ読めるようになりました。

《英語力がついたと感じ始めた時期》

廣田：最初の頃はグノで教えてもらった復習の仕方に従って、ひたすら音読を頑張っていましたが、３、４か月でいろんな英文も少しずつ読みやすくなりました。夏の模試ではそれが成績にも表れました。

音読するときはかっこいいアナウンサーのふりをして、声を変えて読んでみたりして楽しんでいました（笑）。

西尾：高１の頃は少し手を抜いていた時期がありましたが、高２からまた音読を真面目に取り組んだので、模試でもいつも時間が余るくらいに速読力がついていました。

高３のGSLも普通のスピードでしか聞いていませんでしたが、学校のリスニングくらいならいつも普通に満点を取れていました。中学のGSLは文法の例文に馴染む形式で、高校になってからはだんだん長い文章になっていきましたが、それに応じて特に意識することなく、耳が英語に慣れていったと思います。

田鎖：入った当初は、授業の演習量が多くて「きついな」と感じていましたが、その「きつさ」が抜けていったのが２か月くらいたった頃です。そこが伸びの第一ステップだったと思います。３か月くらいたつと「あれ、前とぜんぜん違う！」と自分でも思えるようになって、明らかに力がついていることを実感しました。

週に１度、５時間弱は英語漬けになるというサイクルが私にはとても良かったと思います。

もちろん音読もやりましたが、音読は勉強というよりも息抜きのような感じで、ソファに座って無駄に大きな声を出して家族にうるさがられたりもしながら（笑）、楽しくやっていました。音読は昔からいいとは聞いてはいましたが、グノの良さは、教材がそろっていたことです。やることはグノが用意してくれたので簡単に生活の一部に音読が取り入れられました。



田鎖（たくさり）　遥（はるか）さん（千葉大医学部・桜蔭出身）

須納瀬：僕の場合、浪人してからの夏に、１日３～４時間くらい音読や*シャドーイングをしていました。机に向かっているときは時間がもったいないので、お風呂の中でもやっていましたし、外ではマスクをして口パクでやったりもしていました。素材にしていた要約のプリントは、ほとんど暗唱できるまでになりました。

そして９月を迎えたら突然、英語の力が大きく伸びたのが自分でも実感できて、予備校の校内テストでも全国５番でした。

１日に３～４時間とかいっても、ストイックに自分を追い込んでいたわけじゃなくて、やっているうちに楽しくなったので、途中からは音読やシャドーイングをやり続けたい気持ちが強くなっていました。

グノレットを読んでいる人は、ここに登場する人はもともと優秀な人だと思うかも知れませんが、僕は本当に英語ができませんでした。それでも、グノでやっているうちに、楽しくもなるし成績も上がる、と説得力を持って言えると思います。

*グノーブルお奨めの英語習得法のひとつ、音声教材GSLを聞きながら、影法師を追いかけるように発声していきます。

木下：私はグノの授業をただ受けているだけで伸びたとは思っていないんで



木下（きのした）　茜（あかね）さん（千葉大医学部・学芸大附属出身）

す。忙しくて復習できず、授業を受けるだけになっていたときは、自分でも納得できる成果は得られず、焦りを感じていました。「ヤバイな」と思って、GSL と音読に集中したら、授業を受けるときも少し余裕ができたんです。そのとき「ああ、伸びたな」と思いました。もちろんしっかり授業を受けていたからこそ、伸びるための基礎があったのだと思いますが、GSL と音読をしっかりやったら、さらに伸びるきっかけになったので、そこからはずっとGSL と音読はやり続けていました。

《学校でのグノーブルの評判》

木下：「やっぱりグノに行ってる人の英語はすごいね」という評判はありました。私は英語だけでしたが、国語や数学もグノに通っていていい成績の人も何人もいました。普通、「グノ＝英語」というイメージが強いと思いますが、英語以外の教科でも実績を出していた人は随分いたと思います。

須納瀬：海城では、グノに通う人はそんなに多くはいませんでしたが、グノの英語がいいということは多くの人が知っていました。あと、国語の先生がいいという話も聞いたことがありました。

田鎖：中学生の頃にはグノはほとんど知られていなかったと思います。高１くらいからグノの英語に通っている人たちが、「グノはいいよ」とポロポロっと言っていて、それで、一人二人と増えたら、そうしたら「グノはすごくいい」ということになって、高２の冬休みに一気にグノに入る人が増えました。

桜蔭の場合、とりあえず大手予備校や東大専門塾に通っている人は多いと思います。高３になる辺りで力がついていないことに気づいて真剣に考え始める人もいて、ちょうどその頃に新しい選択肢としてグノが注目されてきたんだと思います。

廣田：高３になるときに、あれだけの人数がグノに移ったということは、密かに皆、「英語はこのままではだめだ」と不安を抱えていたんだと思います。

西尾：城北生の中ではグノの知名度はそれほど高くないと思いますが、知っている人は英語のグノという認識だと思います。でも、グノで数学だけとっている人もいました。僕自身は６年間、英語でも数学でもお世話になりましたから、僕の中では「グノ＝英語」だけではなく、数学もとても分かりやすく、素晴らしい授業をしてくださる塾だという思いがあります。

《グノーブルの先生》

西尾：一番印象に残っているのは、やはり高３の数学の先生です。僕はそれまでも数学には自信を持っていましたが、今考えると、それまでにやった問題がたまたま解けていたから持てていた自信だったんです。一度、その自信を突き崩されて、その後に、あらためて本当の実力を築き直すことができたのはその先生のおかげです。

数学では解法を重視することは当然なんですが、解法に対する裏づけまでを重視する先生で、最短で答えを導き出すことの大切さと手法を、しっかり教えてくださいました。

廣田：冬期講習の初日から「廣田さん」と先生が名前で呼んでくださってびっくりしました。やっぱり先生に名前を覚えてもらえるとうれしいです。それで先生との距離の近さを感じましたし、その後、授業を受けていても、先生としてだけではなく、人として尊敬できる方だと思っていました。

田鎖：グノの先生はすごい先生なのに、まるで偉ぶるところがありません。授業の内容が素晴らしいだけじゃなくて、毎日、長時間に渡って私たちのために全力を尽くしてくださっていることが嬉しかったし、暖かさのようなものを感じていました。

須納瀬：お話されることの背景には常に教養が感じられましたし、それでいて面白いし、頭の回転も、口の回転も速い。それがグノの先生です。それに、情熱的でもあるんです。「先生がこんなに頑張っているのに、俺らがやらないわけにはいかない」という気持ちにもさせてくださいました。

木下：私は３人の先生に教えていただいていましたが、共通して思っていた印象は、「いいお父さんみたいだな」ということです。私たちの成長を暖かく見守ってくださるので、こちらも信頼して授業を受けられました。できなかったからといって見放すわけでもなく、全員平等に優しく見守ってくださったことに感謝していました。もちろん厳しいときもありましたが、その裏には愛情を感じることができました。



廣田（ひろた）　安理（あんり）さん（筑波大医学部・桜蔭出身）

《後輩たちへのアドバイス》

廣田：受験のときは不安に思ったり、焦ってしまったりすることもあると思いますが、たとえば、「私は医師になるんだ」という自分で掲げた目標を常に思い返して、自分自身を叱咤激励しながら頑張って欲しいと思います。

西尾：第一志望は簡単に変えるべきではありません。志望校を簡単に下げてしまうと、モチベーションも下がってしまうと思いますし、勉強をやってい

るときにも簡単に諦めることにつながると思います。

あと、グノでやっている科目に関しては、先生の言うことを信じて、グノのやり方で勉強をやり抜くことです。ふらふらと他の教材に手を出すのではなく、グノの教材を徹底的に復習すべきです。

田鎖：受験学年の１年は、精神的にも辛いし、焦りもあって、先が見えないこともあると思います。そんなときこそ、グノのプリントを引っ張り出してきて、「これ面白いな」と感じられるような英文を楽しむ、という習慣をつけるといいと思います。受験から離れずに、むしろ英語の成績を伸ばすのに役立っているのに、それでも楽しい経験ができる、というのがグノで英語を勉強している人の特典だと思います。

受験勉強が大変なことは当たり前として、適度に楽しみを見出しながら有意義な１年を送って欲しいと思います。

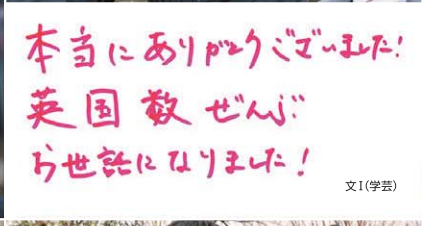
須納瀬：どんな教科でも、目の前の問題を解くことに必死になるのではなく、もっと先を見た方がいいと思います。僕自身も、自分が将来やりたいことのために今の努力があるという気持ちで勉強していました。「この問題を解けば、将来子どもが１人助かる」と、そのくらいの気持ちで、モチベーションが下がらないようにしていくことが大事だと思います。

木下：授業を受けるだけではなく、それを土台にして力を上げていくのは自分、という主体的な気持ちでの復習が必要だと思います。分からないことも放置せずに自力で解決するという姿勢で勉強に取り組むのがいいと思います。

それから、医学部志望の人は、なぜそこを目指すのか、自分と向き合ってじっくり考えておく必要があると思います。面接のときにも、直前になって間に合わせのような対策をしていては見抜かれてしまうはずです。日頃から深く考えていれば、自分の気持ちや考えを、しっかり相手に伝えられる言葉で話せるようになると思います。


文Ⅰ(学芸)


理Ⅰ(立教新座)



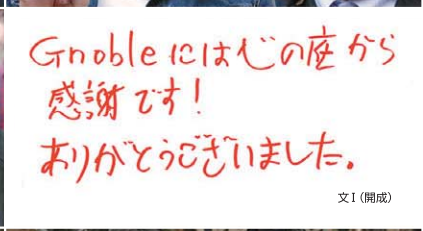
文Ⅰ(学芸)


文Ⅱ(開成)


理Ⅰ(開成)


文Ⅲ(麻布)

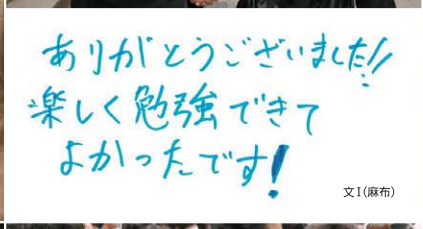

文Ⅰ(駒東)



文Ⅰ(開成)


文Ⅰ(学習院)


理Ⅰ(駒東)



文Ⅰ(麻布)


理Ⅰ(女子学院)


理Ⅰ(駒東)


理Ⅱ(ラ・サール)


理Ⅰ(浅野)

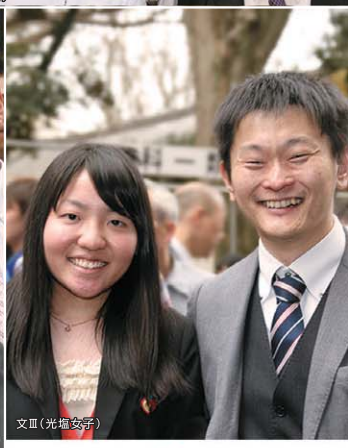

理Ⅲ(田園調布雙葉)

本当にお世話になりました!
これからもがんばります!!

文Ⅱ(桜蔭)


理Ⅲ(日比谷)


左から 文Ⅰ(学芸)、文Ⅱ(桜蔭)、文Ⅰ(麻布)、文Ⅱ(開成)


文Ⅲ(光塩女子)

人間として成長できる
場所、それがGNO
なのだと思います!

理Ⅱ(筑駒)

7期生の皆さん、おめでとうございます。
これからの活躍を期待しています。

※写真は、3月10日
東大合格発表会場にて

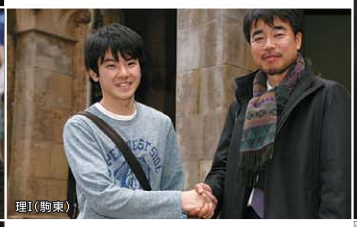

理Ⅰ(麻布)

感謝!

文Ⅰ(学習院)


文Ⅰ(麻布)


文Ⅲ(豊島岡)


理Ⅰ(駒東)


文Ⅰ(開成)

すごく楽しいです!
GNO最高でした☆
ありがとうございました!

文Ⅱ(桜蔭)


文Ⅱ(駒東)

GNOの先生は
世界一!!

理Ⅰ(駒東)


理Ⅱ(桜蔭)

GNOの授業は本当に
ためになりました。感謝
しています。GNO最高!

理Ⅰ(駒東)


理Ⅰ(麻布)

GnoTube

2013年東大合格発表会場の動画配信中!

Gnobleでは、生徒の皆さんと教える私たちは、
相互の信頼と敬意でつながっています。
「距離の近さ」をYou Tubeでご覧ください!



www.gnoble.com/gt/

Gnoble 指導方針　— 知の力を活かせる人に —

夢を叶えるための能力を伸ばす

生徒の皆さんは大きく知力を伸ばす素質を持っています。
しかし、素質は可能性としての能力ですから、うまく引き出し、鍛えていく必要があります。
グノーブルでは、皆さんが勉強の習慣を身につけ、有機的につながった知識を獲得するお手伝いをします。
人生の夢を叶えていく能力を備えられるよう、皆さんを力強くサポートします。

生き生きとした授業空間

グノーブルの授業では演習を大切にしますから、手も頭もいっぱい使います。
教える側は皆さん一人ひとりの名前を覚え、どんどん発問していきます。
活気ある授業空間の中では、きっと時の経つのが早く感じられるでしょう。
一生懸命やるのが当然という空気の中だからこそ、困難な問題に取り組む意欲も自然に湧いてきます。

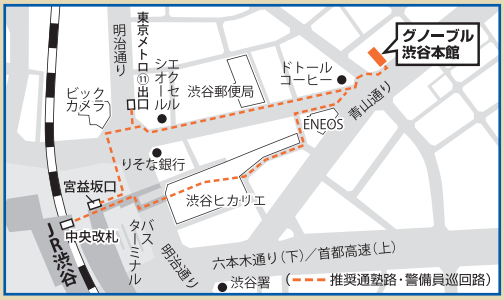
一人ひとりとつながる

教える側にとって大切なことは皆さん一人ひとりを見ることです。
グノーブルでは授業内でも、授業後にもどんどん個別添削をしていきます。
一人ひとりの課題を見極め、クラス全体の状態を的確に判断していきます。
こうした「つながり」から、気軽に質問ができ、伸び伸び勉強に取り組める環境が生まれます。



新宿本館　〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3
新宿GSビル1F

アクセス
JR新宿　サザンテラス口　徒歩1分
JR代々木　北口　徒歩5分
京王新線、都営新宿線、都営大江戸線　出口2　徒歩0分



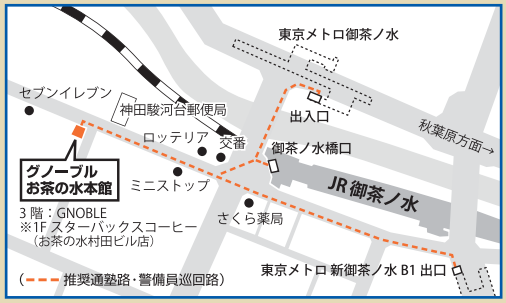
渋谷本館　〒150-0002 渋谷区渋谷1-7-6
青山CRビル1F

アクセス
JR渋谷　宮益坂口　徒歩5分
東京メトロ渋谷　11番出口　徒歩4分
「渋谷ヒカリエ」青山通り方面出口　徒歩1分

大学受験グノーブル事務局【新宿本館・受付】

お問い合わせ
月曜～金曜15:30～21:00/土曜14:00～21:00/
日曜休館（説明会・テスト日除く）
〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3 新宿GS ビル1F

TEL. **03-5371-5487**
FAX. **03-5371-5488**



お茶の水本館　〒101-0062 千代田区神田駿河台2-5-5
村田ビルディング3F（1Fスターバックスコーヒー）

アクセス
JR御茶ノ水　御茶ノ水橋口　徒歩2分
東京メトロ御茶ノ水　徒歩3分
東京メトロ新御茶ノ水 B1出口　徒歩4分

— 知の力を活かせる人に —

Gnoble

大学受験
グノーブル

グノーブルにアクセス。東大にアクセス。
www.gnoble.co.jp
新宿・渋谷・お茶の水

GL11-1306-1